

Shimizupedia（しみずっペディア）

清水地域の各町（大字）の伝承などを紹介します。

昭和 61 年 8 月、旧清水町が発行した「清水町のむかしばなし」の中に収録されている、「各区の伝承」をとりまとめました。

<制作：2017 年 1 月 福井市清水総合支所>
<修正：2022 年 11 月 福井市市民課清水連絡所>

とりまとめに際して

- 昭和 61 年 8 月、旧清水町が発行した「清水町のむかしばなし」の中に収録されている、「各区の伝承」をとりまとめました。
- よみが難しい漢字や地名など、原本にルビが表示されている漢字については、() でふりがなをつけています。(例：天目山 (てんもくやま))
- 和暦や距離などの数値は、原本のとおり漢数字で記載しています。(例：平成二十八年、一・五メートル)
- 「今から〇〇年前」という過去の出来事の記載については、昭和 61 年 (1986 年) の発行時期が基準となっています。このページをご覧になった年から発行時期より経過した年数を足しつもお読みください。(例 2022 年にご覧になっている場合：今から百二十五年前→今から約百六十一年前)
- 文中の合併前の大字名などについては、その大字名の後ろに現在の町名を記載しています。(例：大森 (大森町))
- 文中の清水町 (旧清水町) については、清水地域と修正している箇所があります。
- 清水畑町と平尾町の伝承は 2 町でまとめられています。又、グリーンハイツは片粕町内に記載されています。
- 志津が丘 1~4 丁目は、「清水町のむかしばなし」の発行時点では造成されていないため、伝承の収録がありません。
- 概ね原本のとおりのため、「である」調で記載しています。

清水地域内の町名・大字名やよみかたなどの一覧表

地区名	町名・大字名	ページ	よみかた	旧清水町以前の村域
清水西地区	大森町	P3	おおもりちょう	志津村(しづむら)
	山内町	P5	やまうちちょう	志津村(しづむら)
	笹谷町	P8	ささだにちょう	志津村(しづむら)
	滝波町	P11	たきなみちょう	志津村(しづむら)
	本折町	P13	もとおりちょう	志津村(しづむら)
	清水畑町	P15	しみずばたちょう	志津村(しづむら)
	平尾町	P15	ひらおちょう	志津村(しづむら)
	加茂内町・加茂町	P18	かもうちちょう・かも	志津村(しづむら)
	志津が丘 1～4 丁目		しづがおか	志津村(しづむら)
清水東地区	上天下町	P20	かみてがちょう	志津村(しづむら)
	下天下町	P21	しもてがちょう	志津村(しづむら)
	三留町	P24	みとめちょう	三方村(みかたむら)
	清水杉谷町	P26	しみずすぎたにち	三方村(みかたむら)
	田尻栃谷町	P28	たじりとちたにちよ	三方村(みかたむら)
	竹生町	P30	たこおちょう	三方村(みかたむら)
	清水町	P32	しみずちょう	三方村(みかたむら)
	和田町	P34	わだちょう	三方村(みかたむら)
	小羽町	P36	おばちょう	天津村(あまつむら)
清水南地区	真栗町	P38	まくりちょう	天津村(あまつむら)
	御油町	P40	ごゆちょう	天津村(あまつむら)
	島寺町	P42	しまでらちょう	天津村(あまつむら)
	風巻町	P44	かざまきちょう	天津村(あまつむら)
	片山町	P46	かたやまちょう	天津村(あまつむら)
	清水山町	P48	しみずやまちょう	天津村(あまつむら)
	在田町	P50	あいだちょう	天津村(あまつむら)
	甕谷町	P52	こしきだにちょう	天津村(あまつむら)
	坪谷町	P54	つぼたにちょう	天津村(あまつむら)
清水北地区	朝宮町	P56	あさみやちょう	三方村(みかたむら)
	片粕町	P58	かたかすちょう	三方村(みかたむら)
	グリーンハイツ 1～10	P58	ぐりーんはいつ	三方村(みかたむら)

□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっペディア 大森町の伝承

清水西地区 大森町（おおもりちょう）

1. 天目山城跡（てんもくやましろあと）と安野谷（あのたん）

今から七百六十五年前、後鳥羽上皇は、鎌倉幕府が、上皇の言いつけを聞かないで、勝手に国を治めていたので、この幕府を亡ぼそうと、こっそり味方の武士を集められた。

その時、藤原氏の子孫である、大森二郎時秀という侍もお味方につき、八年前から相撲を教えに、小森（おもり）から上皇に召し出されていた、小藤太の故郷、小森へ来て、天目山に城を造り、織田街道をまもった。

その頃、岩坂の谷が高く、志津川の水がせきとめられ、大森（大森町）、山内（山内町）、滝波（滝波町）、本折（本折町）まで低い所は「志留湖（しどむこ）」という湖になっていた。

天目山の東側の谷を城の大手（正門）とし、屋敷を構え、時秀は「安野（あんの）」と号していたので、この谷を安野谷（あのたん）と呼ぶようになった。この城は東南西は崖で湖に固まれ、北は山で守りやすい城であった。

ところが幕府の北条義時に、上皇の計画を知らせた者があったので、義時は、東海道十万、中仙道五万、北陸の越前へは、北の越後（新潟）方面から、四万の大軍で、京都へ攻め上らせた。

上皇の軍は皆合せでも二万余り、とても勝てる見込みがなかった。尾張・美濃・越前を守っていた者は皆負けて戦死するやら、京へ逃げていった。

大森時秀も、城を捨て都へ退却した。その時三オの子どもを村の百姓の乳母にあずけ、形見の品を置いて行った。そして京都方面で戦死してしまった。

あずけられた子は成長して、大森次郎時總（ときふさ）と名乗って次郎谷（西小校庭の所）に住んでいた。この人が大森家の先祖であるという。

天目山城は、天日神社の後にあり、上が平で、さし渡し五十メートル位、東と南は崖で、西と北は少し低く、そこに二重の空堀（からぼり）がある。

東の大手の谷は広く、元天台宗の善福寺があった所で、近くに「大門」「堂の上」等の地名が残っている。天日神社の所も城の出丸と思われる。

賀茂山（かもやま）に大きい森があり、大森氏の城があったのでこの頃から「小森（おもり）」が、「大森（おおもり）」にかわったように思われる。

2. 堂奇（どうだん）と引接寺（いんじょうじ）

大森区（大森町）の南、山内川の向うの山内（山内町）境に低い杉木立の丘に固まれた谷がある。これを堂谷といっている。

今から約五百年前（長享二年）天台宗坂本の西教寺住職、真盛（しんせい）上人が、越前へ布教に来られ、武生のお総社（そんじゃ）の後へ引接寺（いんじょうじ）を建てた。

時の越前の殿様、朝倉貞景が、このお坊さんを一乗谷へ呼んで教えをきき、貞景の弟が弟子となり真慶（しんけい）といっって修行をして、引接寺二代自の住職を継いだ。

真慶上人は、一乗谷の西、西大味（西大味町）へ新たに分寺の引接寺を建て、開山となった。

それから八十五年後、天正元年八月、朝倉義景が織田信長に攻められ、一乗谷から大野へ逃げて自殺した。その時西大味の引接寺も焼かれ、住職の祐元（ゆうげん）上人が、大森の同行をたよって、御本尊（阿弥陀様）を背負って逃げて来られた。

大森の同行の世話で、この堂谷に小さいお堂を建て御本尊を安置した。そして二十四年後の慶長二年にやっと立派な引接寺のお堂が建てられた。

慶長十二年、住職浄賢（じょうけん）上人の時、真宗大谷派に改宗した。それから百二十四年、享保十六年五月十六日、引接寺が火事で焼けてしまった。

そこで同行と相談して、堂谷から現在地へ移って寺を再建した。天正元年から享保十六年まで百五十八年間この堂谷に引接寺があったわけである。

3. 岩坂（いわさか）の天満宮（てんまんぐう）

岩坂の南の崖の上を天神山という。その頂上に天満宮の小社がある。大森家の氏神で、安政五年（一八五八）に、京都北野の天神様の分霊を、大森家の歌人、蕃立（ばんりゅう）氏がお受けして来てお祭りした神社である。

その二年後、兵庫県の月照寺から、奈良時代の歌人、柿本人麻呂の像をお受けして来て、道真公といっしょにお祭りした。

お宮の入り口には、天神様のお使いの座った牛が置いてある。大正の頃の一年生の遠足にはいつも、遠路見（とおろみ）へ行く道の方から登ってお参りしたものである。



4. 万鍛冶兼則（かたなかじかねのり）

今から四百五十年ほど前、美濃（岐阜県）関の名高い刀鍛冶兼法（後兼則）が越前一乗谷の朝倉義景の城下へ来て万を造っていた。

その弟子の兼則という、上手な万鍛冶が大森（大森町）へ来て万を造った。「大森打（おおもりうち）」と言って名が高かった。しかしその万はあまり残っていない。子孫は明治頃まで志津氏を名乗って、仕事をしていたが、今はいない。

5. 親切な巡礼（じゅんれい）さん

西小学校（清水西小学校）のプールの所から、大森（大森町）側へおると、そこに大きい石碑が、お堂の中にある。

ここは大森の旧道で、西小学校が焼ける前まで、ここから学校へ上る石段があった。

この石碑は、明暦元年（三百年程前）西国三十三カ所の寺を巡礼した、七十四歳の道運（どううん）という人が満願（まんがん：まわり終わった）の記念に建てたものである。

この道運という人はどこの人かわからないが、この人が村の頭だった人達にお話しして、今まで村の用事をふれまわる歩行（あるき）に給米（手当米）が無かったのを、つける様にした恩人だとの事である。

6. 周辺

- ・ 山内町、滝波町、本折町、上天下町、加茂内町、加茂町、風巻町、島寺町、志津が丘 1～3 丁目
- ・ 大森団地、清水ニュータウン
- ・ 清水西小学校、清水西公民館
- ・ 睦月神事会館
- ・ 天目山、天神山
- ・ 国指定重要無形民族文化財 睦月神事

□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっペディア 山内町の伝承
清水西地区 山内町（やまうちちょう）

1. 大むかしの山内と仏木村（ほうてんむら）

今の山内（山内町）の在所の南、栃川坂の下に、なだらかに北の方へ低くなっている「平等（だいら）」と呼ばれている大きい台地がある。

台地もその両側の谷も皆、田んぼになっているが、その一番南の奥に「仏木（ほてん）」と言う所がある。

大むかしから、ここに仏木村という村があって、村の人は、この台地や、両側の谷の田んぼを作って暮していた。その頃は、大森（大森町）の岩坂が高く堰きとめられていて、山内の在所の辺まで湖であった。

それがだんだん岩坂がけずられ、低くなって湖がなくなり、湖の底が田んぼに開かれた。それで仏木から大森境まで、田んぼを作りに行くのに遠いので、今の山内の東端の「上野」という台地の下「蛇崩（じゃくち）」へ、一軒、二軒と仏木から下りて来て、だんだん南西へ家がふえて、山内の村が出来た。

始めておりたのは、千五百年もまだも前の話で、仏木の村にはむかしから、証光寺という古い天台宗のお寺があった。その後、親鸞聖人が水落（鯖江市水落町）を通られた時、住職さんが改宗したと伝えられている。

ところが、四百年程前、この寺は真宗でも山元派であったので、一向一揆の焼きうちにあい、寺も民家も皆焼かれてしまった。それで、お寺も家も皆、下の山内へおりて、仏木村は無くなってしまった。

このお寺は今の野口（笹谷町の一部）の本覚寺で、明治の終りまで向出の台地にあったが、山内に同行が無かったので、野口へ移った。

元、証光寺の御本尊薬師様は、仏木村の所のお堂に安置してあったが、古くなって元禄十二年十二月始、大雪でつぶれたので、この仏様を山内の神様へ、いっしょにお祭りし、元のお堂がある所へ、験（しるし）の石塔（せきとう）を建てて置いた。

明治十三年に、仏木の荒れ地を田んぼにした時、石塔がじゃまになるので、近くの山の中へ移した。

そして仏木村のあった所は、皆田んぼになっているが、山すそに清水（しょうず）や、お墓のかけらが残っている。

2. 武者川（むしゃかわ）と武者橋（むしゃばし）

笹谷（笹谷町）から山内（山内町）を通過して大森（大森町）の下（しも）で、志津川と合流する川を、昔は武者川といい、南朝寺と山内境にかかっている橋を武者橋と言っていた。武者とは侍の事である。護良（もりなが）親王に関係があって付けた名前かもしれない。

昔は四ヶ浦（越前町四ヶ浦）、織田（越前町織田）方面から、福井へ出る一番近い道であったので、通る人も多く、道巾も橋巾も、七尺（2.1メートル）あった。

今から百六十年ほど前、土橋であった武者橋が古くなったので、造りかえる事にした。土橋では早くいたんでしまうので、兩岸を石垣で積みあげ、石橋にする事にした。

石橋にするには費用が多くかかるので、奉加（ほうが：寄付）を集める事に村の相談がきまり、庄屋と長（おさ）百姓（庄屋を助けて村の世話をする役）二人で、この橋を通過して行く、各村々、笹谷から糸生（越前町糸生地区）・萩野（越前町萩野）・織田（越前町織田）・四ヶ浦（越前町四ヶ浦）・厨（越前町厨）まで、奉加集めに行く事にした。

笹谷、糸生の各村、萩野織田の各村から、四ヶ浦厨まで、泊りがけで出かけて寄付金を集め、やっと立派な石造りの武者橋が出来上った。

3. 妙見堂（みょうけんどう）と太閤堂（たいこうどう）

山内（山内町）の加茂神社の森の東に「上野」という広い台地があり、最近までは、村の家々の小さい畑がたくさんあった。（今は土地改良で田になっている。）

この畑へ登る道は神様の南と北に一つずつあった。北側の登る道は急な坂道で「堂坂」と言われ、坂の中段の南側に、横約四メートル、たて六メートル程のお堂があり、村の人は妙見様と呼んでいた。

中には大人位の大きさの、刀を振り上げ目を光らせ、おからだは黒く、所々金箔をはった恐ろしい姿の妙見様が正面の台の上に祀ってあった。

恐ろしい顔形の仏様なので、腕白な男の子だけしかこのお堂で遊ばなかった。

このお堂は山内渡辺の本家、為依（ためより）のお堂で、仏様は元仏木村証光寺にあったものかも知れない。お堂の下の屋敷は、護良（もりなが）親王を山崎（京都府と大阪府の境）までお送りした、山崎久太夫の屋敷のあった所である。

為依屋敷はその北、一段下がった所の広い田んぼになっている所で、上下合わせて五反（0. 五ヘクタール）ほどもあり、高い塀と立派な門構えの家であった。

その屋敷の北庭に、たて二メートル、横一・五メートル位の太閤様を祀ったお堂があった。このお堂は、むかし太閤検地の時、護良親王御遺跡の鶉が丘の土を、まわりの蓮池や堀のうめたてに使い、為依が自分で開田した。その手柄で蓮池四石免税の御墨付（おすみつき）をもらった。その御恩を思いこのお堂を建ててお祀りしていたと思われる。

昭和六年に為依家が東京へ移った後、両堂の御神体は持って行き、妙見堂は島寺へ売られて、竜雲寺のお堂となり、太閤堂は織田の剣神社へ移されて、その境内のどこかに建てられてあるとの事である。

4. 牛頭天王御輿堂屋敷跡（ごずてんのうみこしどうやしきあと）

燈ろう見坂の峠の下の道、上半分は山内（山内町）、下半分は大森（大森町）の地籍である。山内の道になっている途中の道の南わきに「牛頭天王御輿堂屋敷」と彫ってある石碑が立っている。

この石碑は裏に「享保十年二月吉日」と彫ってある。これは約二百六十年ほど前になる。その頃までここに、賀茂の祇園社の御神輿堂があった所である。ここがお神輿の休み場所であった。

昔からの言い伝えでは、朝日町天王（越前町天王）八坂神社に祇園さんが祀ってあり、大森の賀茂さんにも本社の横に祇園さんが祀ってあるので、両方とも祇園祭りには、氏子村々を御神輿と傘鉾（かさほこ）の行列がねり歩いた。

ところが享保の始めごろ、両社の御神輿がたまたまワッショイ、ワッショイと、村境の遠路見坂まで来て出会い若い衆同志の喧嘩になった。処が賀茂方は氏子の数が少なかったので負けて御輿はこわされ、取られてしまった。

その後、賀茂さんでは、御輿を作らず、傘鉾だけで大太鼓をたたいて氏子村々を回った。それで御輿堂はいらなくなったので壊し堂跡のしるしにこの石碑を建てた。



5. 吉左エ門（きっさえもん）どんの神さま

山内（山内町）の加茂神社の拝殿の北、二十メートルほどの所に一メートル四方位の小さいお堂が建っている。これを吉左エ門どんの神様と呼んでいる。

山内は清水（清水地域）で一ばん溜の多い所で、谷の奥にはそれぞれ溜が造ってあり五十ほどもある。この溜の水で田んぼを作っている。

そして、この溜池は魚つりや、水泳ぎなど子ども達の遊び場になっているが、時折溜にはまって死ぬ者もあり、また身投げをする人もあった。

山内では家によっては井戸を掘っても水の出ない場所が多く、御所垣内（ごしょがいち）の北側に、昔は護良親王（もりながしんのう）の御神水と呼ばれた大きな清水が上・下二か所あったので、その水を汲んで水がめに入れて食水にしていた家が多かった。

この清水は、一・八メートル位の大ききで底には川石が敷いてあって濁らない様にしてあった。しかしこの清水へ水を飲みに来た子どもが、口をつけて飲む時すべて溺れ死にした事もあった。

このような子どもの災難を何とか無いようにしようと、心配していた吉左エ門どんの主人の枕もとへある夜神様が現われ「わしがこの災難が起らぬようにしてやる」と夢のお告げがあった。

それで、その神様の春日大明神と兵主（ひょうず）大明神を、明治三十四年四月一日にお堂を建ててお祀りした。

それから毎年、七五三の神詣りには加茂神社とこの神様へお詣りするようになり、子どもが災難にあわぬように祈って帰るとのことである。

6. 周辺

- ・ 大森町、笹谷町、滝波町、加茂内町、島寺町、坪谷町、志津が丘 2～4 丁目、越前町栃川、越前町大畑
- ・ 市指定文化財（史跡） 護良親王御滞留伝承地

□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっペディア 笹谷町の伝承
清水西地区 笹谷町（ささだにちょう）

1. 貴船神社（きふねじんじゃ）

賀茂神社の摂社（せっしゃ）で、京都の賀茂神社にならって、貴船神社を建てた。このため賀茂神社と特別な関係にあり、馬場が貴船神社の近くまで続いていた。

御祭神は、高雷龍神（たかおかみのかみ）と闇雷龍神（くらおかみのかみ）の二神で水の神様（龍神）である。京都貴船神社の分霊を祭っており、右側の旧厨司（ずし）に安置され、土地の者は隠居様と呼んでいる。正面の新厨子には三体の御神像が祭っており、大正八年に新しい厨子が寄進された。

神社の横には、御神水の池があり、眼病に効くといわれ、昔はお水もらいの人が多かったと言われ、蒲生、栗崎方面（越廼地区）からの信者が多く、眼病治癒のお札に小さい駒犬を奉納したので、厨子の脇に駒犬がいくつも残っている。

2. 菅田神社（すがたじんじゃ）

中垣内の笹谷（笹谷町）には、山観音堂と薬師堂の二社があったが明治四十三年に二社を合併して菅田神社とした。大正時代の終り頃別々にお堂が建っていたのを、本殿を建てて一社に祭った。

3. 八幡神社（はちまんじんじゃ）

四ッ合（笹谷町の一部）の八幡神社の御祭神は、応神（おうじん）天皇で阿弥陀如来の坐像が安置されている。南北朝の時代足利高経が、四ッ合荒神（こうじん）が峯に城を築いていたので、武将の守護神八幡神社を祭ったものと思われる。

明治三十九年神社廃合令が出されて、無格社は由緒ある村社以上の神社に合併するよう勅令が出された。その基準として氏子が百二十戸以上あることと境内が百八十坪以上あること等であった。幸いに野口（笹谷町の一部）の貴船神社は由緒ある村社で、菅田神社、八幡神社を合併することに報告した。

ところが隣村の山内（山内町）には無格社上山神社があったが、何とか村社に昇格して存続するため、四ッ合の八幡神社と氏子を、山内へ一時借りて村社にしてもらう事に「約定書」を取り替した。そして加茂神社と改め村社に昇格した。しかし名義だけの約束であったが御神体を中々返してもらえず、四ッ合の者が取り返しに行ったとの事である。

4. 護摩堂（ごまんどう）

野口（笹谷町の一部）の村の中央に、室町時代護摩堂が建っていた。護摩堂とは、真言宗や天台宗の秘法の一つで、護摩（ヌルデの木）を燃やして一切の悪業、煩惱を焼きつくす護摩壇のあるお堂である。この場所は、内田●（日へんに廣）家前で今から二百四十年ほど昔の文書に、「覚 一、畠 壱ヶ所 五まんどう 清兵衛分 此歩 弐拾五歩 延宝四年卯十二月」と書いてある。

5. 随応寺（ずいおうじ）

笹谷（笹谷町）の中垣内に、随応寺という真言宗の寺があった。この寺の開基は宗信という尾張の人で、延文元年（室町時代の始め）に越前国の笹谷村（ささだにむら：笹谷町）へ来られ、随応寺をお建てになった。

この頃の寺院は、近辺の山にお堂を建てたので、南には釈迦（しゃか）山、法師（ほうし）山、堂ヶ谷、黄金堂（こがね）、東には堂宮、浄土、銭亀（ぜにがめ）の近くには鐘（かね）つき山、大門、釈迦堂、護摩堂、五拝（ごはい）などの、寺院の七堂伽（が）らんになんだ地名が残っている。このことから随応寺は相当大きな寺院であったのではなかろうかと、推測される。

その後、二代目の空信というお方が永徳元年三国へ移られ、性海（しょうかい）という寺を建てられ、「笹谷山（ささだにさん）」と山号をつけられた。この時、笹谷村をなつかしんで、「かえるらん

幾うらうらのあまの舟 ささ谷山の入りあいのかね」という歌をよまれたと伝えられている。

6. 荒神が峰城址（こうじんがみねじょうし）

四ッ合（笹谷町の一部）の南に豊蔵が岳（ぶんぞうがたけ）という山があり、大谷寺（越前町大谷寺）、小倉（越前町小倉）、四ッ合の山境の頂上に荒神が峯城があった。

この城は南北朝の時代に足利高経が築いて、ここに見張りの兵を置いていた。ちょうどこの四ッ合は府中（武生）、四ヶ浦、織田方面（越前町）から北の庄（福井）三国方面へぬける間道（裏道）の大切な道であり、せまい谷で敵をくいとめるのに最も重要な場所であった。

興国元年（今から六百五十年程前）、脇屋義助（わきや）が三千余騎の兵で足利高経の織田城、荒神が峯城、天目山城（大森町）など十七か所を、三日三晩かかって攻め落とし、高経は加賀の那谷城へ逃げこんだ。

しかし間もなく軍をたてなおして、越前へ攻め込んで府中城をはじめ、次々と脇屋義助方に奪われた城が取りもどされた。

荒神が峯城も守っていた兵が逃げてしまった。平吹城にいた義助は美濃（岐阜県）から吉野へ逃げた。鷹巣の畑時能（ときよし）は戦士し、越前は足利方が平定して北朝方となった。

この戦いについては「太平記巻二十一」に書かれている。四ッ合には武将の守り神八幡神社が、城の麓に祭っており、城あとには空堀と礎石が残っていて、「さかきぐみ」（十月頃開花）と縞笹が生えていると言われている。

7. 土居村（つといむら）

昔、鎌倉・室町時代に笹谷（笹谷町）高地に土居村という村があった。今は筒井と書くが、昔の記録には土井・土居と書いてある。

この村は、「あちらつつい」「こちらつつい」「後口山」などに散在して家があったらしく、今でも屋敷あとが残っている。村の氏神様は地蔵山の上にあったが、近年大谷寺（越前町大谷寺）大長院の境内へ移した。

天文十三年、一向一揆の争いの時、笹谷乗泉寺の了珍が、この土居村に逃がれて住んでいた屋敷あとも残っている。

享禄二年、室町時代の終り頃の大谷寺文書に、土居村の山持ちが年貢として、野口（笹谷町の一部）貴船神社へ正月米四升と、祇園祭りに米五升の代金五十文を納めたと書いてある。

このほか、九月九日の菊の節句には、大谷寺大長院の神事の経費を、土居村が負担する慣例となっていると書いてある。

このように栄えていた土居村も、江戸時代には、笹谷や野口・大谷寺へと移ってしまった。大谷寺の水島家は、元土居村に住んでいたと伝えられている。

8. 中垣内大門地蔵尊

笹谷（笹谷町）中垣内のポンプ小屋の四つ辻に、大きな地蔵様が立っている。宝永三丙戌萱（かや）元陽廿四と銘がある。

今から二百八十年前の古い地蔵である。元種池（福井市）の坪川武右エ門家にあったのを、明治初年に島勝応（かつまさ）がゆずりうけ、岡の渡辺音松さんが背負って持って来たと言われている。

9. 法度坂（はっとさか）

大谷寺（越前町大谷寺）へ参る坂道で、江戸時代福井御城下から大谷寺越知山へ通ずる近道として、最も多く利用された道であった。急な坂を登りつめると、福井平野が一望できる峠があり、ここから大谷寺の寺領となっていて、大谷寺法度（寺の規則）が行われていた。

10. 南朝寺（なんちょうじ）の廃寺（はいじ）と寺地払下げ

福井藩主松平家の菩提寺運正寺（福井市足羽一丁目）の末寺「平野山地蔵院南朝寺」には、山内（山内町）、笹谷（笹谷町）に多くの寺地をもっていた。山林十町歩、田地三反七畝二十三歩、宅地壹畝

二十五歩余りであった。

しかし檀家が無かったので寺の維持は、この年貢米で賄っていたが、明治になって土地制度が変わり、また経済状態などの悪化により、寺所有地を払い下げることになり、当時の金千二百円で売却され、また浄土宗運正寺末寺、南朝寺の建物も壊されて、本尊阿弥陀如来は福井の運正寺へ、平野山地蔵院の本尊腹帯地蔵尊は、笹谷島勝応（かつまさ）の屋敷内へ移され、また六体地蔵の石仏は、四ッ合（笹谷町の一部）へ払い下げられ、梵鐘（ぼんしょう）は横山（越前町横山）の常光寺へ買却された。



11. あじちと島勝応（かつまさ）

笹谷（笹谷町）の旧家渡部与四郎家を「あじち」と呼んでいた。江戸時代の大高持ちの渡部与右エ門の長男の与四郎が別家したので「あじち」と言っていた。

屋敷は三反三畝歩もあり、前には葛野（かずらの）陣屋の払い下げ門（十八間二階建ての長屋門）が建っていた。

笹谷では、葬式の行列も遠慮して裏道から三昧（さんまい）へ行ったとの事である。

この渡部与四郎は文化人で、渡部家の先祖は、嵯峨源氏（さがげんじ）の渡辺綱の子孫であるとして「源儀珍（ぎちん）」と名乗り、鸚助（おうすけ）と号していた。またその子の勝応は、先祖は上野国（こうずけのくに）島の郷（ごう）なので、渡部の姓を「島」と改めて島勝応と名乗っていた。

弘化二年五月から嘉永元年二月まで家業の医師の勉強のため上京し、京都新町仏光寺浅井三河介惟（すけただ）良について三年十か月間、内科漢方医の修業を積んだ。

嘉永六年六月笹谷で医者を開業した。当時駕籠（かご）に乗って往診し、薬代・診療費は竹筒に「志（こころざし）」を入れさせ、金は請求しなかったとの事である。

明治時代になってからは、四十八大区四十七ヶ村の区長となり、また明治十二年には第一回の県会議員に選ばれ、明治十八年まで県政に参画した。

しかし、後継者に恵まれず、明治二十八年六十八歳で惜しまれながら亡くなった。

12. 周辺

- ・山内町、滝波町、加茂内町、島寺町、白滝町、越前町大畑、越前町小倉、越前町上糸生、越前町大谷寺、越前町東二ツ屋、越前町天谷
- ・滝波ダム、SSTランド
- ・市指定文化財（彫刻） 木造腹帯地蔵菩薩像

□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっペディア 滝波町の伝承
清水西地区 滝波町（たきなみちょう）

1. 地名といわれ

滝波（滝波町）は、白滝（白滝町）から川の流れが、滝のように波打って流れる村として「滝波」の地名が生れた。

大むかしは滝波の奥まで湖の底であったと言われ、加茂内台地の北側に、「舟卸し」という名が残っていたり、林道工事のときには「カラス貝」の化石がでている。

最初に開けた所は、黒谷あたりだといわれ、後になって山を下りて嵯峨山（さがやま）のふもとの高野（たこの）に住み、それからあとだいぶんたって現在の山すそに住むようになった。

2. 西徳寺

越知山大谷寺（越前町）一千坊の一つで一二七〇年のむかし、行儀菩薩が彫刻された五智如来（ごちによらい）の本尊と共に兵火をまぬがれるために、お自分で深谷に出られたと伝えられている恵心僧都（えしんそうず）自作の阿弥陀如来立像が本尊である。

3. 観音堂・地藏堂（かんのんどう じぞうどう）

西徳寺の境内に三十三観音をおまつりした観音堂がある。この観音さまは、三十三体の「変化観音（へんげかんのん）」で世の中を隅ずみまでよく見渡し、苦しみの声をよく聞いて、救いの手をさしのべられるために、いろいろお姿をかえておられる観音様である。

入口の左右に大きな地藏が安置されている。この地藏群はもと別棟の地藏堂にまつられてあったが、今は観音堂にいっしょに安置してある。六体地藏尊も安置されている。

4. 五智如来様（ごつつあまさま ごちによらいさま）

地、水、火、風、空にして、三身円満三即一の尊像で、日本三所也と縁起書に書かれている。本尊は行基菩薩が彫刻されたものであると由緒に書いてある。

五智如来（中央大日如来、右側薬師（やくし）如来 宝生（ほうしょう）如来、左側釈迦（しゃか）如来、阿弥陀如来）

守護神 持国天（じこくてん）、多聞天（たもんてん）（四天王の中二天）

聖観世音菩薩 地藏菩薩

5. 犬飼神社（いぬかいじんじや）

祭神 犬飼大明神は、大むかし鷹狩に用いる犬を飼育する氏人、農産物を荒らす野獣を退治する犬を飼う氏人などの祖先をまつた神社である。

賀茂神社の末社で、もとは賀茂神社の台地に建っていたが、ずっと後になって現在地に移された。

6. 地藏盆

滝波（滝波町）には、ところどころに地藏さんが安置されている。むかしから毎年八月二十三日に子ども達が掃除をして灯明（とうみょう）をあげたあと、「地藏盆」が行われる。

この地藏盆には、神社の拝殿に集って楽しい催物（もよおしもの）をする。この時村人のおまいりした者には、菓子をくばるならわしがある。

7. 人見塚（ひとみつか）

滝波（滝波町）高地の切り通しの下に小さい丸い山があった。この小山はお供の生けにえ人の塚ではないかと伝えられている。

太閤検地の時、太閤様がこの塚の土をなめて、肥え土であるか、やせ土であるかを見分けたと言わ

れている。

8. 黒谷

滝波（滝波町）で早くから人が住みつき、開けたところで、清水がわき出る山ふところである。南北朝の時、私市（きさいち）家の祖先が黒谷へ落ちのびたといわれる。

また、天正年間には、一若三位局（いちわかさんみのつぼね）が愛王丸を抱いてかくれていた処である。

9. がらがら山

村ばなに、滝波（滝波町）区有地の採石場があり、「がら山」又は「がらがら山」と呼んでいる。火山岩の一種である流紋岩が露出している山である。流紋岩は扁平にわれやすく、道路に砂利として利用されている。

10. 私市家（きさいちけ）

私市（キサイチ）の姓は日本全国で八十二戸しかない。滝波（滝波町）に十戸ある。

六百五十年前、斯波高経（しばたかつね）が新田義貞を攻めたとき、新田氏についていた「私市党」の一族が滝波の黒谷に逃げ込んだといわれ、現在の私市家の祖先であるといわれている。

11. 服部九郎エ門家（はっとりくろうえもんけ）

一四六〇年ほど前の継体天皇の時代、大和の国にいた日子八井命（ひこやいのみこと）という人の子孫が、天皇の命によって、越前の国を開くために来られた。この人が服部家の祖先である。この人は生れつき顔が黒かったので、人びとは黒右衛門といったという。

代だい「舎峨山（しゃがやま）」に住み、義経主従をかくまったり、朝倉氏によくつかえたりした。また、太閤検地のときにも忠勤にはげみ、「服部」の姓をたまわるなどいろいろな働きがあった。

12. 広部与三右エ門家

広部一族の祖先であるともいわれ、代だい庄屋、長百姓をつとめ滝波（滝波町）の発展につくした。

江戸時代に福井藩主の代替りの折、越智山大谷寺（越前町）御社参には、本陣宿（殿様の宿舎、休憩所）をつとめた。今も殿様用のおぜんやおわん、ソバの入れ物、ソバこね棒やソバ棒、ソバ板など保存されている。

13. 広部早苗（ひろべさなえ）

嘉永二年三月、志津村滝波（滝波町）の広部家（檜谷（ひのきだん））の長男として生れた。幼少のとき、賀茂神社の広部重直宅の寺子屋で学び、成人してからは、役場や大森郵便局につとめた。

後に京都の歌人、赤松祐以（あかまつゆうい）に師事して和歌を学び、「千逸（せんいつ）」と号した。明治二十二年新年勅題に詠進し見事に佳作に入選した。本県で最初の榮譽である。

14. 周辺

- ・大森町、笹谷町、本折町、清水畑町、加茂内町、島寺町、白滝町
- ・滝波ダム
- ・城山
- ・県指定文化財（彫刻） 木造大日如来坐像 附 金剛界四仏
- ・市指定文化財（彫刻） 木造持国天立像 木造多聞天立像 木造聖観音菩薩立像 木造地藏菩薩立像

□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっペディア 本折町の伝承
清水西地区 本折町（もとおりちょう）

1. 本折（本折町）のはじまり

本折の南はなの所で志津川の支流が北の谷から流れこんでいる。この川を小別川という。

この小別川の奥の谷は広く長く続いて、奥半分は福井市末町の地籍となっている。この西の台地に和敬学園があるが、この辺に大むかしの焼き物を作った窯跡がいくつも残っている。

また、小別川の近くには、昔の人が食べた、しじみ貝の捨て場と思われる、しじみ貝のからのかたまりが所々土の中から出てくる。

この事から考えると、歴史以前のむかしから人が住んで居たと思われる。

小別川の谷から、今の在所のある所へ移って来たのはいつ頃かわからないが、昔は滝波（滝波町）の出村になっていた。

本折の名は斉藤実盛（さねもり）、実員（さねかず）が付けたと言われている。これは、石川県の小松市に本折町があることから、ここは斉藤実盛のゆかりの地であるので、弟の実員が戦いに負けて、ここで百姓になって住み付いた時、小松の本折の名をとって、本折とつけたのではないかと思われる。

小松の本折町に多太八幡神社があるが、斉藤実盛が近くの篠原で戦死した時、木曾義仲が恩人の実盛を弔うため、実盛が身体につけていた鎧、甲（義朝から拝領）錦の直垂（ひたたれ）（平宗盛から拝領）すね当等をこの多太八幡様へ奉納した。今宝物になっている。

滝波から分れて、村を造ったのは今から四百年ほど前、太閤検地の時からだと思われる。昔も今も分村するには色々むずかしい問題が起きる。検地役人に境をきめてもらえば、楽に分村出来る訳である。

検地の十五年前、秀吉から賀茂神社に下した禁制札（きんせいさつ）には本折の名は書かれていないが、その七十年前の大谷寺（越前町大谷寺）に残る書付けには本折村の名がのっている。それで本折の名は分村前からあった事は間違いない。

本折に多い斉藤氏も林氏も同じ、鎮守府将軍藤原利仁（ちんじゅふしょうぐんふじわらとしひと）の流れ、同族なので実員といっしょに本折村に住み付いたものと思われる。

2. 臼清水（うすしょうず）と美濃峠（みのとうげ）

本折（本折町）の南はし、林康明家の高い屋敷の西下の田の江川の処に清水がわき出ている。昔は浅い泉で通る人の水飲み場に使われ、その道わきに石が置いてあって、通る人の休み場であったといわれている。

この道から大森（大森町）へ行くのには一番はしの斉藤敏胤家の、家の後ろからだらだら坂を左へ登り、谷田を横切って、低い美濃峠を通り、坂道を下って、大森の村ばなへ出る道であった。

この道を美濃手といい この峠から美濃国の山が見えるのでその名がついたといわれている。明治三十一年から二年にかけて現在の道に造りかえられて旧道は跡だけ残っている。

3. めのう原石掘り跡

清水（清水地域）では本折（本折町）と山内（山内町）に、時々めのう原石が見付け出される。今から百五十年程前、小浜のめのう細工をする人が本折へ来て、めのう原石を掘り出していたが、しばらくで止めてその跡だけ残っている。

4. 見田越（けんたごえ）

本折（本折町）在所の下から、小別川の西ぞいに東の方へ旧道がついている。その道を少し進んで行くと、道が二つに分れ、北へ行くと小別の谷へ行き、東へ進み小別川の橋を渡って行くと、古い見田越えの道がある。

この道は上天下（上天下町）へ行く道で、本折の方からはだらだら坂で、峠には石地藏さんが道の

わきに祭ってある。峠をこすと、少し急な坂があり、三十メートルほどで又だらだら坂があり、しばらく行くと上天下と出村（大森町の一部）の間へ出て上天下の青土の崖の所で旧県道につながっている。

昔はこの道が福井から清水畑（清水畑町）を通過して、大味（大味町）の浜へ出る本道であった。峠の所は見晴らしがよく、山つつじが沢山あって春は通る人の目を楽しませ、また秋はもみじやぬるの木等が赤く色どって、紅葉の名所ともなった。

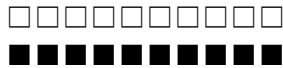
文政三年五月、福井の殿様松平治好（はるよし）公が、ここをお通りになり、しばらく床几（しょうぎ）に腰掛けられて、これをながめられ、本折の小林長兵衛家で休まれて、浜の方へ行かれたといわれている。

安政年間には、本折斎藤家の本家三郎右エ門が私財を出してこの道を拓げ、峠の上の広場で上天下の次太夫さんと、本折の惣八さんが、寄附金集めの角力大会をしたといわれている。

峠には石地藏さんが道のわきに祭ってある。

5. 周辺

- ・大森町、滝波町、清水畑町、平尾町、上天下町、末町
- ・城山



しみずっぺディア 清水畑町・平尾町の伝承

清水西地区 清水畑町・平尾町（しみずばたちょう・ひらおちょう）

1. 村のおいたち

清水畑（清水畑町）・平尾（平尾町）は、明治十五年に分村するまで一村であった。志津川の上流、末から流れて来る平尾川、平尾の奥の荒谷から流れて来る川、白滝界（しらたきさかい 白滝町境）の山から流れて来る川の三つが、一つになって流れて行く所にあるので、昔は清水俣（しみずまた、あるいは泉俣（いずみまた））と言った。

この村は、もと山のすそから、今の在所の上まで広がっている平らな台地のまん中位の所にあったので、そこに神明前、神明奥、庵林、寺所等の地名が残って居る。白山神社も元は白滝界にあった。

北側の台にあった家は平尾の谷へ移り、台地の真ん中より南にあった家は今の清水畑の所へ移ったと思われる。

泉俣（清水俣）村が平尾清水畑村に変わったのは、慶長年中、今から四百年ほど前の頃であると言われている。

千二百年程前、奈良に都があった頃、泰澄大師が越知山を聞く前、まず泉俣（清水畑）にお留まりになり、平尾の荒谷の奥、三本松の頂上が真近に見える所まで登られ、独鈷（とくこ：お坊さんのもつ金の棒）で岩を破って清水を湧出させ、百姓たちには農業を教え、次に光巖寺を建てられたといい伝えがある。

この泰澄大師の御恩に感謝するため、大師の御尊像を造って、清水畑公民館（※清水畑の集会所）の神棚にお祭りしてある。

2. 黄皮田尾（きはだお）の赤土

清水畑（清水畑町）の在所の南西に、黄皮田尾という山がある。この山に良い赤土が出る。この赤土は上塗用の壁土に使われ、色つやがよく、ひび割れしない良い土なので、昔から清水畑壁（しんばたかべ）と言って有名であった。

この赤土を掘り出し、かますに詰めて各地へ売り出し特産物であった。勝山市の比良野家で三百年余りも前に建てられたという座敷の壁が、清水畑壁だと言うのを聞き、昔から有名であった事がわかる。勝山までどうして運んだのか、日野川から九頭竜川をさかのぼって運んだものか、馬の背に積んで運んだのか、遠方まで送られていた。

明治初年まで、山から掘出し臼でついて粉にし、ふるいにかけて、かますにつめて出していたそうである。

3. 寺所（てらどこ）

清水畑（清水畑町）から白滝（白滝町）へ行く道を少し行くと少し田んぼのある谷合いに出る。その清水畑（清水畑町）がわの北に寺所という所がある。

これは清水畑光巖寺（こうげんじ）のあった所であるが、はじめに建てた所は白滝境の雛谷（ひなだん）という所で、白山神社跡の近く、坊屋敷（ぼうやしき）があって、後、寺所へ移ったとの事である。

光巖寺はもと真言宗であったが、五百年程前天台宗西教寺の真盛上人が、越前へ教をを広めに来られた時、教をきいて改宗し天台宗真盛派となった。

今から四百年ほどむかし天正十九年になって、善悦（ぜんえつ）（善哲）上人が住職の時、真宗に改めようと同様に相談した。ところが反対者が多かったため、住職は寺を出なければならなくなった。

それで、平尾（平尾町）・末（末町）境に小さいお堂を建てて住んでいたが、のちに末村字出口に移り、本願寺派、専超寺（せんちょうじ）となった。住職方に味方した一部の家も末村へ移ったという。

反対者の一部は中野本山と大森（大森町）の善福寺へ移り、大部分はそのまま光巖寺に残ったとい

うことである。

4. 大神宮の神様

清水畑（清水畑町）の白滝（白滝町）へ行く新道のわきに、鳥居が見え、鳥居の奥に、高さ六十センチほどの石造りの小さいお堂が石板の台の上にある。祭神は天照大神である。

このお堂の中には径十センチほどの丸形の石が、十二個積み重ねて納められ、これが御神体である。

このお堂はもと川向いの山の中段にあったのを、高橋家の本家、喜兵衛（喜右エ門）の守り神であるので屋敷の所へ移したと言われている。

喜兵衛家は太閤検地の時、いづりはこの開田に力をつくした家で、その頃から、八朔（九月一日）に祭りがあり、竹生（竹生町）のお神主さんが御祈禱をし、豊作と平和を祈願した。

御祈禱の前に、お宮の前へ、三又を作り、その上に八升鍋をのせ、米を二つかみと水を入れ、式が終ると、その下で藁（わら）を二・三把（ぼ）燃やす。

藁がもえてしまうと、参った村人は争って、鍋の中の米を五六粒ずつほど持って帰り、紙袋に入れ、神棚へ上げておく。

そして、子どもなどがおこり（マラリヤ）にかかると、この米粒をのませて、おこりをなおしたという。

5. 平家の末裔

船戦（ふないくさ）の平家と言われていた平家が、下関海峡の壇の浦で、源義経の軍船に散々にまけ、戦死又は逃げ各地の山奥へ隠れた。

平清盛の弟、経盛（つねもり）は一の谷の戦に負け、子の経正（つねまさ）ほか三人戦死し、敦盛（あつもり）は船に乗り遅れ熊谷次郎直実（なおざね）に討たれた。その時十七歳であった。

老の身の経盛は幼い乗経（のりつね）、供盛（とももり）を連れ、少しの家来を船にのせ、平家の船団から離れて、あちこち流れあるいて、下関から日本海へ出、だんだん北へ行き、能登（石川県）の日蔵島（軸倉島－輪島の沖五十キロ）へ上陸した。

然しこどもも楽に暮せる所でないので、越前の鮎川（鮎川町）へ上陸し、その山奥の三本木（国見町）へ入り、百姓となった。しばらくして経盛は老年のため死亡し、弟の供盛は鮎川へ下りて百姓となって暮した。

兄の乗経は子供三人を連れて、あちこちと流れあるき、三代目になって、武士をやめた。そして、馬医者となってあるきながら、山中の薬草をとって売り、暮しを立てていた。

四百三十年ほど前の永禄二年三月になって、平尾（平尾町）の田中甚太夫という人と仲よくなり、田中家の分家あつかいで、平尾に住みついたのが桑島家の祖先であると言われている。

平尾の光養寺も、平家の子孫か、平姓（たいらせい）を名乗っておられ、元は天台宗で、末（末町）境に近い「尼が平」の台地にあったと伝えられている。

其の後、今から三百二十年程前、寛文二年八月、焼けてしまった。水の便が悪かったので、十二年後今の場所へ移ったと言われている。

6. 平尾（平尾町）・清水畑（清水畑町）の分村

平尾、清水畑はもと一村で、平尾が出村の形になっていた。処が明治の始、全国の田畑等を測り直して、新しく田畑等の広きを定めて、税金を取り立てる地租改正が行われることになった。

そこで平尾側から、この折に清水畑と分村しようとして、清水畑側へ申し入れた。清水畑では反対する者が多くて、中々決まらずそこで裁判にかけようとした。

その後両村が相談した結果、明治十三年から始まったこの問題が、分村にきまって、県から通達が出た。

清水畑村

反別四拾町七畝八歩

戸数 五拾七戸 人口 二七八人

平尾村

反別二拾町八反十七歩

戸数 四拾五戸 人口 二三二人

それで明治十五年三月十三日、このように分村した。

7. 天保の飢饉（てんぼうのききん）

天保七年、今から約百五十年前、全国が冷害で半作もとれない悪作だった。雨ばかり降って寒く八月中にもあわせの着物を着、七月迄老人子供は行火（あんか）を入れて寝た。九月には白山に雪が降って真白に見えたと言う。

半作しかとれないお米は皆、お上の年貢に取られてしまって 百姓の食べる米はほとんど残らなかった。それで百姓は山の草や木の葉などで食べられるものを取って来て食べた。

天保八年正月頃から食べ物がなくて飢え死にする者がたくさん出て来た。其の上悪い病気がはやって、清水畑・平尾では百六十人余り死に、家が死に絶えたもの十八軒、乞食に出て帰らぬもの五軒あった。

それでも年貢の取立はきびしく、納められないため、庄屋は五日間、長百姓は十日も牢に入れられた。天保九年八月にも年貢が収められず入牢となったといわれている。

8. 周辺

- ・滝波町、本折町、平尾町、上天下町、白滝町
- ・農村活性化施設
- ・城山

□□□□□□□□□□



しみずっペディア 加茂内町・加茂町の伝承

清水西地区 加茂内町・加茂町（かもうちちょう・かもちょう）

1. むかしの賀茂山（かもやま）

加茂内台地は、志留湖（しとむこ）という大森（大森町）・滝波（滝波町）・山内（山内町）にひろがっていた湖に面した台地で、早くから人が住みついた所である。古代の住居の跡や、石斧（せきふ）、石錐（せきすい）や矢じり、弥生式土器、土師器（はじき）、須恵器（すえき）の破片が多数出土している。

特に焼き物の石錐（網のおもり）が、発見されたことから、湖で漁をしたものと思われる。そして賀茂神社の西側に「舟卸し」という地名があり、大昔の舟付場であったと言われている。

その後、賀茂神社の境内となって、大杉がうっそうと茂っていて、大森の地名が生れた。この杉は数百年以上もたった大木で、目通り一丈以上の木が麻のように立っていて、昼でもうすぐらかった。そして年輪が細かく木の色が良く、美しい木目がでるので「賀茂杉」と呼ばれる銘木（めいぼく）として名高かった。

2. 賀茂山杉の伐採

賀茂神社の社地は、境内の他に十六町七反歩（約十七ヘクタール）の山林があったが、明治八年に国有風致（ふうち）保安林に指定され、勝手に伐られなくなってしまった。

そのため、神社の財政が苦しくなったので、明治二十四年頃から、神主と氏子が相談して国有林払い下げの運動をはじめた。

ところが中々認可が下りず、陳情などの飲み食いに多額の金がかかり、明治三十四年によく認可が出て、有償払い下げとして金壱万九千九百円を国庫へ納めることになった。

しかし、すぐには金が出来ないで、当時の県会議員野尻太三郎が立て替えて納入した。その後、立て替え金をつくるため、伐採権が野尻太三郎と上天下総代になって、早速伐りにかかったが、神主と氏子側から契約違反の訴えが、福井地方裁判所へ出された。

その後、双方が上告して明治三十八年には、大審院まで持ちこまれた。そして泥沼の争いとなり、訴訟の経費が雪だるまのようにふくれあがった。

明治四十年になって、平尾清水畑（平尾町、清水畑町）の中立派が仲介に入って、和解が成立した。その時、裁判経費などの清算のため、賀茂杉を次々と伐採して、裸山にしてしまったとのことである。

3. 四か村入会地（いりあいち）

賀茂溜（ため）の北側と東側一帯は、昔から雑木林で野口（笹谷町の一部）、滝波（滝波町）、山内（山内町）、大森（大森町）四か村の入会地（共有地）であった。持山の無い者がここで薪（たきぎ）をとっていた。入会地は無年貢で、雑木林を小割にして伐採権を与えていた。明治になって一時国有地になったが、払い下げられた。しかし持主が入り交っているので、各字の境界がつけられない土地となった。

4. 稲荷神社（いなりじんじゃ）

加茂内町の南に小高い丘がある。形が美しく大きな古墳ではないかと思われる。この丘の頂上に「狐神様」と呼ばれていた稲荷神社が建っている。戦時中雪のため倒壊してしまっていたが、昭和二十一年加茂内町の新しい村が誕生した時、氏神様として山頂二百坪を共有地とし、二間に一間の社殿を建てた。この時内田久右エ門家の堂谷にあった観音様を合祀（ごうし）した。

5. 賀茂神社の馬場跡（ばばあと）

賀茂神社の大鳥居の左から、加茂内町の真ん中をまっすぐに野口（笹谷町の一部）の柳が辻溜池近

くまで、平坦な道が続いている。

ここは、もと賀茂神社の馬場跡で、南側の加茂溜の山内（山内町）境に「大馬谷（おおうまだん）」「小馬谷」という地名があるが、この馬谷は「馬繫場（うまつなぎば）」であったと言われている。

京都の賀茂神社では昔から、宮中で行われていた「流鏑馬（やぶさめ）」を神社の年中行事の一つとしていた。

志津の庄の賀茂神社でも、京都賀茂神社の行事にならって、この馬場で「流鏑馬」を行った。

この競技は、馬に乗って走りながら、鏑矢（かぶらや）で的を射るもので、この賀茂神社では、鹿の胴から上の絵を描いた板を、鹿の立っている高さに釣り下げ、足の部分は草にかくれて見えぬ事にし描かなかった。

この的を三か所つくり、射手は馬に乗って走りながら、次ぎつぎと鏑矢で的を射る競馬の一種である。

いつ頃から行われるようになったかわからないが、江戸時代の中頃まで行われていたとのことである。

弘化四年、今から百四十年ほど前、福井藩主松平春嶽公が越智山大谷寺へ参詣された折、賀茂神社境内で休憩された。その時神主に「境内の右の方に広い道があるが馬場跡ではないか」と、お尋ねになられたところ、神主は「京都の下、上賀茂神社の例にならって競馬をした跡です」と答えたと、春嶽公の日記「みゆき草子」に書かれてある。

なお、越前地名考という書物には、「競馬興行の馬場あとあり。馬場の長さ四町半余」と、書いてある。

6. 周辺

- ・大森町、山内町、笹谷町、滝波町、坪谷町
- ・ふくい健康の森
- ・市指定文化財（史跡） 賀茂神社窯跡
- ・市指定文化財（建造物） 賀茂神社脇社祇園社、木造賀茂神社大鳥居

□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっペディア 上天下町の伝承
清水東地区 上天下町（かみてがちょう）

1. 村のおいたち

大むかしは、西谷村といって、大森出村（大森町）境から、北へ入る法谷の西北にあったという。それが、千年以上も前、南向きで谷の奥から清水がよく出ている、南向きの「谷向い垣内」に移り住んで上天下村が出来たという。

その後、小羽（小羽町）へ行く追分の手前のせまい谷に「土断（どばし）」という出村が出来、今の上天下のものが出来た。大雨の時は、志津川の水が田んぼに流れこんで屋敷も田んぼも水浸しになる事が、度たびあったので、家は谷の奥の高い所へ建てて住んでいた。

2. 悪源太義平（あくげんたよしひろ）と石川庄兵衛家

今から八百三十年程前、京の都で平治の乱があり、源氏と平氏が戦って、源氏が負け東へ逃げた。源氏の大將、源義朝の長男、二十歳の悪源太義平は逃げる途中、美濃（岐阜県）で父と別れ、大野の油坂峠から越前へ来て、大野の朝日にしばらくいてから足羽（福井市足羽町）へ来てかくれた。

その頃、天下（上天下町）の庄兵衛さんは大地主で、石場（いしば 足羽町）にも家があった。義朝の家来、斉藤実盛（さねもり）は越前の者で、負けてから一足先に越前へもどっていた。

石場に実盛のお寺があって、庄兵衛さんを知っていたのか、義平をかくまってくれる様頼んだらしく、庄兵衛さんは喜んで引受け、目立たない田舎の天下の家へつれて行き親切にかくまってあげた。

或る日の夕方、お風呂をわかして、義平様に入ってもらい、次に庄兵衛さんの子供が入ろうとした所、少し熱かった。それで水を入れてくれと言った時、義平はその子に、「自分も子どもの頃お湯が熱いと小言を言った処、父は、熱湯をたらいに入れて自分にもたせ、立たして置いて、男の子が少し湯が熱いからといって我慢が出来んようでは立派な人にはなれん。後から入る人がぬるくて迷惑する。」と言って叱られた事を話して、庄兵衛さんの子を諭したとの言い伝えがある。

それから、庄兵衛さんの家ではいつもその話を子どもに代々伝えていましめにしたとのことである。それから十日程たって、父義朝が一月四日に尾張国（愛知県）で、もとの家来長田致致（おさただだむね）に入浴中だまし討ちにされ、首を清盛の所へ送った事をきいた。

そこで義平は何とか父の仇の清盛を殺そうと、一人で京都へ出かけようとした。庄兵衛さんが「今は都には平家の者ばかりで危ないので、今しばらく時期を待って仇を討ってはどうか」と思いとどまるよう注告したが、きかずに油坂峠から美濃を通過して京都へ忍びこんだ。そして下男に変装して邸（やしき）をうかがったが、守備兵に固まれ屋根づたいに逃げ、後、逢坂山（おうさかやま）で捕えられ、六条の河原で首をはねられた。

3. 俳人石川白兔（はいじんいしかわはくと）

今から約二百七十年程前、石川庄兵衛家の主人、弥三治（やそじ）孝勝は俳句を好み、三国の俳人岩名昨囊（さくのう）という人と友達となった。そして三国に家を借り、無職では役人にとがめられるので、入口の土間に石臼を据え仕事をしているように見せかけ、俳句づくりをしていた。

そして昨囊の世話で、その頃有名な松尾芭蕉の弟子で、十哲の一人、美濃（岐阜県）の各務支考（かがみしこう）の門人となり「白兔」の号をもらった。

その後、三国・福井の仲間と俳句の会を聞き、商売や仕事をしないで俳句に熱中した。

正徳五年に山中温泉で、加賀の俳人や支考と共に俳句の会を聞き、支考の許しを得て、この句会の句に今までの句を加えて「菊の十歌仙」という句集を出版した。この句集は、国会図書館と石川正平家にしか残っていないとの事である。

4. 庄兵衛家と御用達金

天下（上天下町）の庄兵衛家は、江戸時代中頃には「天下屋」といって、福井の金屋、慶松家（け

いまつけ)と並んで三大商人として、福井藩の御用をつとめ、石場に屋敷を持っていた。

幕府の巡見使など福井藩の大切な客が来られると、この三軒が御用宿にきめられていた。

八代將軍吉宗の時代、巡見使、高力平八郎が来られた時、石川弥三次孝勝はその御案内役をつとめた。

その頃、福井藩は領地が半減されていて、藩の財政が苦しかったので、御用商人からお金や米を借りて財政を賄っていた。

石川庄兵衛家でも多額な御用金を調達していた。或時、七駄片馬に千両箱を積んで、福井の御城下へ行くのを村人が見たと伝えられている。

七駄片馬とは、馬一頭に千両箱二つを振分け荷とした馬七頭と、一頭には一箱積んでいくことで、一万五千両の大金であった。

その頃、用達した金は約三万両で、米は二万一千俵にも達したと言われている。

そして、弥三次孝勝は年とってから、もし子や孫に不心得者が出て、この証文で殿様へお金を請求する事のないようにと、証文は残らず差し上げてしまったという事である。

5. 日下部道音の墓

風巻(風巻町)浄明寺住職の弟の道音というひとは、大正の始め頃上天下(上天下町)の和讃講(わきんこう)の人に、お勤めや仏法をわかり易く説いて聞かせた。そしてまた、渡辺嘉右エ門家を借りて、日曜学校を聞き、子ども達にも仏の道を教えていた。

道音さんが亡くなってから、両天下(上天下町、下天下町)の講中の者がその徳をしのんで、谷口松太郎家の道の傍らにお墓を建てた。墓には、光林院釈道音と彫ってある。

6. 法谷(ほうたん)の溜池

法谷地籍は、大森(大森町)の地積であるが、この谷の奥にある法谷溜池は、上天下村(上天下町)が大森より卸し請けしている土地で、竹生村(竹生町)、片粕村(片粕町)へ「また卸し」していた。この溜池は、竹生、片粕の水不足を補うために福井藩の援助で造った溜池である。この溜池の水を一本柳(志津川近くの大森町の小字名)から志津川へ流して、三留(三留町)地籍から竹生、片粕用水へ流すわけである。

この借地米として二石六升八合を、竹生、片粕から上天下が受取り、上天下では七斗を大森へ年貢として納めていた。

この法谷溜池については、次のような言い伝えがある。福井藩の殿様にかくし子があって、片粕に住まわせて置いた。そのため片粕村に対して、隠まってもらう礼として、遠くの上天下から水を引いて便を与え、我が子への「脇き付け」としたとのことである。

7. 周辺

- ・大森町、下天下町、和田町、小羽町、末町、本堂町

□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっペディア 下天下町の伝承
清水東地区 下天下町（しもてがちょう）

1. 村のおいたち

下天下（下天下町）の地名の由来について、慶長絵図（けいちょうえず）に三留郷手賀村（みとめぐうてがむら）と書いてあるが、貞享二年の越前国指南に、はじめて下天下村の名が書いてある。

越知山大谷寺縁起に、「古記に曰く蚕種（さんしゅ）の天より下りたる所を天賀（ていが）という」と書いてあり、天蛾（てんが）が天賀（てが）、天下（てが）と通じ、昔蚕種の産地であったので、天賀といい、後天下と書くようになったのではなかろうか。

現福井市の殿下（でんが）も、天賀が訛って殿下と言うようになり、昔は蚕種の産地であった。

2. 六才橋（ろくさいばし）

下天下（下天下町）から三留（三留町）へ通じる橋を「六才橋」と呼んでいた。

元の橋は、現在の宮永製作所の南の方八十メートルの所に、架かっている、竹生（竹生町）、片粕（片粕町）、三留（三留町）、杉谷（清水杉谷町）方面へ通じる重要な橋であった。今から二百二十年程前の明和六年の橋架け替え仕様書によると、長さ五間半、巾五尺の石橋で、橋脚も高く木の欄干がついていた。

以前は、手摺がなく六才になる子どもがこの橋から落ちて死んだので「六才橋」と言うようになったとの言い伝えがある。

大正四年に、竹生一久喜津（久喜津町）一狐橋の道路が県費支弁道に昇格し、念願の久喜津橋が架けられ、これまでの猿和田（和田町）一清水尻（清水町）堅野橋は使われなくなり、下天下一竹生間に「志津川橋」が架けられ、この時「六才橋」は、三留区の宮の越に移され、下天下一三留間の近道として粗末な橋が架けられた。

そして昭和五十六年には「みせや堤」に鉄筋の立派な永久橋が架けられ「六才橋」と名付けられた。

なお昭和二年頃から始められた、志津川の大改修事業により、屈曲した志津川の両岸に立派な堤防がつくられ、元の六才橋も架け替えられ三和橋と名付けた。

下天下の村はずれから、旧六才橋への別れ道に、樹令三百年以上のくぬぎの大木があり、浜街道の目印となっていて、この辺を「こーど」と呼んでいた。

3. 木田庵寺（きだあんでら）

下天下（下天下町）の村端和田区（和田町）境の「木田の端（はた）」という所の中段に「木田庵寺」という天台宗の寺があった。現在は杉林になっていて、境内は一五〇坪もあり、井戸跡と思われる湧水のあともある。

天正二年六月に一向一揆の兵火にかかり焼かれてしまった。その時住職が鐘を穴に埋めて逃げたと伝えられ、その後、夢のお告げで其の穴を掘ったところ鐘が見つかった。

その後、寺跡から五輪塔や宝篋印堂（ほうきょういんとう）の残欠（ざんけつ）がみつきり、現在和田の谷口彦右エ門家の墓地（和田金比羅宮の横）に集められてある。

4. 天和田小学校跡

明治五年、学制発布によって、明治七年に上天下村（上天下町）と下天下村（下天下町）と猿和田村（和田町）の三村で「天和田小学校」が下天下の村端に設けられた。この時はじめて腰掛式の机が使用され珍しがられた。その時の教師は、小羽の萩原源太郎氏であった。

明治二十年に三留村（三留町）に気比小学校ができたので、学区の変更があり天和田小学校が廃止になり、三留の気比小学校へ統合された。

明治二十三年には、志津村（おおよそ今の清水西地区）に編入され気比小学校から分離し、下天下の民家を借りて校舎とし、大森小学校下天下分校が設けられた。（現渡辺辰夫家作業場付近）そして、

明治三十四年には、上天下の小峠の北側の現在地に志津小学校天下分教場が建てられた。

5. 下天下古墳群

八王地山の峯から上天下（上天下町）の高峯にかけて、尾根づたいに十数基の円墳・方墳が築かれてある。なお標高一五三・九メートルの三角点の建っている所の古墳は、清水町（清水地域）内で最も高い所につくられてある。

6. お講様（おこうさま）

下天下（下天下町）には、広善寺・浄明寺・明源寺（羽坂）の同行があり、垣内別の上出講・下出講・女講（尼講）などに分れていたが、現在は村一体となり垣内の別がなくなった。お講様は毎月一回男は二十八日、女は十六日に定められ、順番で宿をすることになっている。

昔はお手つき講の場合は、昼食時に集って「お勤め」をして、終って精進料理の膳に向い、酒などを飲んで法話や、世間話しに花を咲かせ、夏は昼寝をして夜再び夕食前に「お勤め」をして、夕食の膳につき酒を飲んで夜十時頃東本願寺から戴いた「御書様（ごしょさま）」を拝読して散会した。

お講様の御飯は、当番の者が前日に米二合を集めて、いっしょに炊いて「めんこ」に盛って食べる。食器は、汁椀、煮しめ椀、お飯椀、飯杓子、蓋椀を共同購入し、大きな木箱に納め輪番に持ち回った。しかし、終戦後はすたれて食事の風習もなくなった。

7. かつきの紋所

この紋所は、家紋帳にも載っていない珍しい紋所で、ヌルデの葉の先の方三枚を図案化した紋である。この紋は千四百年程前、仏教を日本に取り入れようとする蘇我氏と、反対する物部氏とが争った時、聖徳太子は、仏の道も神の道も同じであるとし、進んで、仏教を取り入れるべきであると、蘇我馬子と共に物部守屋と戦った。

この時太子は、かつ木（ヌルデ）の木で、四天王（仏法を守護する仏）の像を刻まれ、頭の前髪の中に入れて「私を勝たせて下さったら四天王の寺を建てお祀りします」と誓い、ついに物部氏を亡ぼした。

そして、難波へ四天王寺を建立し、かつ木の三葉を太子と四天王寺の紋所としたと伝えられている。

このように「かつ木」の紋所は由緒ある紋である。
この紋所を下天下（下天下町）の宮永一族が家紋としている。
昔、聖徳太子が下天下へおいでになった折
祖先の与三という人が頂戴したと伝えられている。

8. 周辺

- ・上天下町、三留町、和田町、小羽町



□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっぺディア 三留町の伝承
清水東地区 三留町（みとめちょう）

1. 村のおいたち

三留（三留町）という区は三方村の前身的な意味をもつとともに、三留の郷のもとともなっているといわれている。

三方という言葉の発祥は、日野川、志津川、天王川の三つの川を中心とした流れが、一か所に集って、瀉のようになっていた。それで三つの瀉の村から、「三瀉」と呼び、「三方」と宛字で書くようになったと言われている。

また古文書の中には「三溜」という字が所どころにみられる。これは、三つの川が集まった所の意味をあらわすものと思われる。

時代が流れ、河川の改修が行われて、湿地が乾地となり、何時の間にか「みため」が「みとめ」と訛って「三留」と宛字を書くようになった。

住みにくかった三留の地も、今まで山の上にはいた人たちもだんだん下におり、また他の地方から移住してきた人もあり、現在の住みよい村になった。

この三留に朝倉氏の一族が城をつくって、住んでいたのが、今住んでいる人びとの中には、朝倉一族や、気比神社社司一族の血を引いているものも多いということである。

2. 宝尾山の大蛇（ほうおさんのだいじゃ）

今でも窪坂（くぼさか）の上は、地熱が高く雪が早く消え、そこから窪坂へ流れる水道に泡が出ている。近ごろ三留区（三留町）の人で、大きな蛇をみたという人がいる。その人の話では、色は黒くその蛇の太さは十センチ位の大ききだという。その外この地には蛇がたいへん多いので、気をつけているといわれている。

これは、地熱が高いので蛇が住みやすいのではないかと思う。この山から流れ出る水は温かいので、稲がよく育つともいわれている。

村人はこの大蛇は、竹生の溜池の主ではないかといっておそれられていた。

明治の中ごろ大蛇の住むといわれる山地に、温泉を作ろうと、鉄杭を三本打ちこんだが、岩にあたって破れなかった。何とか温泉をと考えたが、資金がなく中止したという話が残っている。

3. 三留の古墳

東小学校（清水東小学校）北側の山の尾根を少し登った所に、円墳二基がある。この古墳上に尾崎与右ヱ門家の墓地がある。ここから急な山道を登った山の頂上に、立派な前方後方墳がある。長軸二十三メートル、墳丘二・七メートルの典型的な古墳である。古墳の前と後が方形になっている「前方後方墳」は珍しく、古墳時代前期の四世紀頃の豪族の墓と思われる。

なお、五位山の頂上に円墳があり、昔この古墳の上をならして、弥勒堂様の祭礼の時、角力や踊りが行われたと伝えられている。

4. みっしや堤と水争い

小羽山の北を流れる志津川が、三留（三留町）の稲葉山（気比神社の山）の近くで、直角に曲って竹生（竹生町）の方へ流れている。この曲り角の堤防を「みっしや堤」といい、大水のたび毎に堤防が切れたり、また、切り落したりして水げんかとなった。

大雨の時、志津川が先に満水になり、志津川の水が一応減水すると、今度は日野川の水が満水となり、三留、杉谷（清水杉谷町）が湖ようになる。この水は一方は片山排水路へ、一方はみっしや排水路により志津川へ排水されるが、日野川の水位は仲々下らないし、広大な杉谷、三留の沖田の水が、水位の低い志津川へ流れる。このため下天下（下天下町）、和田（和田町）、清水（清水町）の水田の水が何日も引かない訳である。

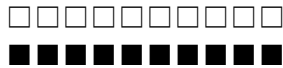
このような利害の相反する立場にあるため、水争いが絶えなかった。

江戸時代の記録によると。寛政三年、弘化二年、慶応二年に「みっしゃ堤切り落し」の大事件があった。

近くでは、昭和三十四年八月と九月に、台風十三号、十五号が襲って、災害救助法が出された。この時、みっしゃ堤で、双方の間で大騒動が起き、県警本部機動隊が出動し、仲介のため自民党視察団が来町するという大事件となった。

5. 周辺

- ・ 下天下町、清水杉谷町、田尻栃谷町、竹生町、風巻町、小羽町
- ・ 清水東小学校、清水東公民館
- ・ 市指定文化財（史跡） 三留城跡



しみずっペディア 清水杉谷町の伝承
清水東地区 清水杉谷町（しみずすぎたにちょう）

1. 村のおいたち

杉谷（清水杉谷町）は、もと東の田尻（田尻栃谷町）側の南、桂連山麓（けれんさんろく）に在ったと伝えられている。今も屋敷跡や社寺跡が残っている。大昔はこの辺一帯は湖沼のような低湿地で地名に「南沖」「南浦」「船積場」などの名が残っている。

この桂連山麓の元杉谷村は、後現在地に移り、氏神様は桂連山頂へ移し、もと神社境内跡には石塔を建て、観音像が安置してあり、「元文四未年九月吉日建之」と書かれである。昔はこの付近に大杉が生い茂っていたので、「杉谷」の地名がおこったとの言い伝えがある。

また桂連山麓から片山（片山町）の新光寺（片山町の一部）にかけての地名に「門前」「釈伽畔（しゃかごろ）」「鐘撞島（かねつきしま）」「堂島」などの名が残っている。これは、広善寺が、「小谷山薬王寺広善院」と呼んでいた頃、この辺一帯に七堂伽藍（がらん）が、並んでいた、その名残であると伝えられている。

2. 報郷隧道（ほうきょうずいどう 杉谷トンネル）

杉谷（清水杉谷町）から福井へ通じる難所田尻坂（杉岡惣兵エさん横の道）があった。急な坂道で、糸生の大谷寺方面の木炭は、牛の背に振り分け三・四俵ずつ積んでガラガラと鈴の音を鳴らし、馬子唄を唄いながら毎日この田尻坂越えて福井へ通った。また杉谷、三留（三留町）ではさかんに菅笠（すげがさ）が造られ、春先になると、大阪方面へ送り出された。菅笠を積んだ荷車は、この坂がなかなか越せないの、夜明け前になると、家族が総出で、車の後おし、先き引きを手伝ったと聞いている。

大正の始めごろは、西田中・福井間の郡道は、島寺（島寺町）から片山（片山町）－栃谷（田尻栃谷町）－朝宮（朝宮町）を通して福井に通じていた。

地元の人達は杉谷を通るよう県当局に陳情を重ねていた。しかし杉谷と田尻（田尻栃谷町）の間には急な田尻坂があり、これを掘さくして隧道（ずいどう トンネル）を作らない限り郡道にすることはむずかしい。その為には多額の工事費の地元負担金を出さねばならず、村ではそのお金の目途がたらず、困っていた。

ところが、嘉永三年杉谷の勝木勘右エ門の五男として生れた大久保権蔵さんが、後東京に出て金物商を営み、努力を重ねてたくさんのお金を持つようになった。この大久保権蔵さんが、たまたま福井へもどって来られた時、この話を聞いて、故郷へ恩がえしはこの時と、当時のお金で一万円のお金の申し出があった。このお金を基に隧道工事は始まった。

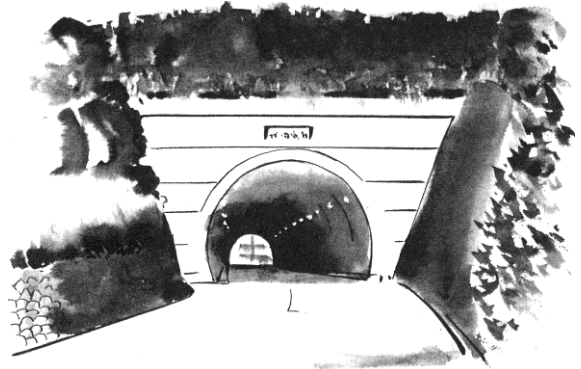
村人の願いがかなえられ、最後のハッパを仕掛けて
岩石が破られ、初めて二尺ばかりの穴があき
日の光とともに田尻の民家が見えた時は
区民一同おおよるこびで、代わる代わる穴のぞきに行っ
たとのことである。

やがて村人の待望の隧道が大正十五年五月完成し
大久保さんの郷土に報いる尊い意志をくんで
「報郷隧道（ほうきょうずいどう）」と名づけられた。

六月二十七日県知事、郡長の来賓を迎え
盛大な落成式が挙行された。

昭和三年入口の南側に記念碑を建て、その芳志を後世に伝えている。

現在のトンネルは昭和四十三年、拡張工事が行なわれ歩道、電灯もつけられて面目を一新した。



3. すげ笠の碑

杉谷（清水杉谷町）は、湿地帯があり、菅（すげ）の栽培に適しているとともに、水害による被害が毎年続いて、米が全くとれない年もあったので、副業として、江戸時代から菅笠づくりを始めた。杉谷には菅笠商が何軒もあり、近在の笠を買う笠問屋と、遠く関西方面までも行商に行く人も多かった。この菅笠も昭和初期を最盛期としてだんだん衰えて、今では民芸品として少々作られている。そのため勝木勘次郎氏の篤志（とくし）により、杉谷区三叉路に、「菅笠の碑」が建てられ、菅笠特産地の名残を伝えている。往時のすげ笠の産地は、杉谷、三留（三留町）、小羽（小羽）、風巻（風巻町）、上天下（上天下）、下天下（下天下）、田尻栃谷（田尻栃谷）、下江守（下江守）、久喜津（久喜津）、福、種池の各区であった。

4. 白山神社の薬師如来（やくしによらい）

拝殿の正面に、薬師如来とその脇侍仏（きょうじぶつ）の日光、月光菩薩、十二神将の外、毘沙門天、不動明王などの仏像が安置されている。

この仏像群について、広善寺の由緒書の中に次のように記されている。

広善寺は、もと天台宗で小谷山薬王寺と言っていた。そして当時の御本尊は薬師如来で、行基菩薩がお作りになられた。そして十二神将は、泰澄大師の御作であると伝えられている。

その後、文明三年、今から五百二十年ほど前、蓮如上人が吉崎へお出になられた時、住職の栄久法師が上人に帰依（きえ）し、浄土真宗に転宗した。

その時、蓮如上人の御寿影（じゅえい）と御名号（みょうごう）を下された。それで、浄土真宗では、御名号を本尊として礼拝するので、薬師如来、日光、月光菩薩、十二神将などの仏様を、氏神様の白山神社へ預けられた。

このような訳で、白山神社に仏像が安置されているわけである。

5. 周辺

- ・三留町、田尻栃谷町、島寺町、風巻町、片山町

□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっペディア 田尻栃谷町の伝承

清水東地区 田尻栃谷町（たじりとちたにちょう）

1. 村のおいたち

田尻・栃谷・古屋の集落からなっている。地名については、奈良時代東大寺の荘園「椿原の庄（つばきはらのしょう）」の田地が、片山新光寺（片山町の一部）の前に広がっていた。この椿原の庄が、朝宮（朝宮町）の谷間へ続いている田地の端が田尻であり、栃谷は栃の木が茂っていたところで、その名が生れた。栃の実は古代人の食物として大切なもので、大昔はこの辺にも茂っていたが、今ではほとんど絶えて、奥越の山間部にだけ残っている。栃（とち）と名のつく地名は、このように古代人の集落が、近くにあったことを物語っている。

近くの片粕山（グリーンハイツ 4 丁目付近）の中腹には、縄文中期頃（紀元前二・三千年）古代人が住んでいた縄文遺跡があり、すぐ近くの田尻栃谷（田尻栃谷町）の小高い丘陵の上（元ブドウ山）などは、古代集落がつくられていたのではないと思われる。

2. 田尻栃谷堀割大工事（たじりとちたにほりわりだいこうじ）

杉谷区片山区田尻栃谷区（清水杉谷町、片山町、田尻栃谷町）が寄り合っている穴虫、おかたん橋付近は、土地が低く洪水のときは、最後まで水が引かなかったので、百姓たちは何とかしてこの排水を、朝宮・栃谷（朝宮町・田尻栃谷町）のせまい谷から日野川へ落すことは出来ないものかと、以前から考えられていた。

千メートル以上の堀割（ほりわり）工事には、巨額の経費がかかるので、中々着工できなかった。

この新堀割の場合、今までの排水河川である、新保水路は、日野川との落差が小さいが、朝宮付近では落差が大きく、排水路として完全排水が出来ることが測量の結果わかっていた。

一方下天下（下天下町）と三留（三留町）との間で大雨の時沖田が満水して志津川筋「見せや堤」が決壊して、日野川筋の水が下天下・猿和田（和田町）の沖田に流れこみ、水争いが絶えなかった。

この事件の根本的解決策としては、朝宮・田尻栃谷へ新しい堀割りをつくって、排水するより仕方がないとの事で、実地見分の上、関係十七か村の間で、新堀割普請（ふしん）規定を結び、大工事を着工することになった。

この堀割は大工事で、堀割組合一同は、領主に巨額の借金を申込み嘆願書を出したり、村々への工事費分担が大きいのので、儉約申合せ事項をきめるなどして、慶応三年の春着工し、十二月末完成の予定であった。

さしもの大工事も付近の百姓人夫を総動員して、着々と完成に近づいた。ところが、思いがけなく、古屋の切り通しの一番深い所が、何回も崩れおち、工事が長引き、十二月完成の予定を、役所へ検分日延べの願いを出し、人夫の増員などで堀割工事の完成は翌年慶応四年春に延期されることとなった。

ところが、この年九月八日明治と改元され、徳川幕府二百五十余年の幕藩体制はおわり、明治新政府が誕生した。

この政変の真只中で、大工事堀割が完成し、排水路に水を落すことが出来た。しかしどのような経過、いきさつか不明であるが、突然明治元年春、「埋めこみ仰せつけられ候に付」と文書にかかっているとおり、埋めてしまう事になった。その理由については、土地の古老も知らないが、水が流れたことは親から聞いているとの事である。

埋めこみの理由は、「堀割不用に相成り見詰も御座なく候」と、如何にも残念至極な文章でつぶられている。

ところが埋めるにも、多数の人夫と金がかかり、明治二年に工事が始まり三年春には又多額の借金をした記録が残っている。

近郷近在の百姓たちの多年の念願であった堀割工事が、巨額の費用と農民の汗と労働の協力によって完成したものの政変のまきぞえか、異議申立ての方法もなく、「まぼろし」の堀割として記録にとどめられている。なおこの埋めもどし水路の田んぼの作柄（さくがら）が、今日でも違うとのことで

ある。

3. 天保の飢饉（てんぼうのききん）

天保七年の大飢饉には、食べ物がなく片山（片山町）の山の後にあった田んぼと、ダンゴ三つと交換したという。随応寺の過去帳には、天保七年に十一人、天保八年には四十二人死んでいる。当時四十三戸あった田尻栃谷（田尻栃谷町）で二戸に一人以上餓死した。

4. 浄明寺寺屋敷跡

杉谷・田尻隧道（杉谷トンネル）の北側、田尻垣内神明神社の右側の谷に、風巻（風巻町）の浄明寺があったと伝えられる。この谷を「坊谷」と呼んでいる。

一向一揆の争いの時、本願寺頭如上人が織田信長と和睦し、即時停戦の講和を結んだが、その子の教如上人は大阪石山本願寺で籠城を続け、徹底抗戦を続けていた時、浄明寺の西の道場（田尻道場）の廿四日講と廿八日講から、教如上人へ銀百匁を軍資金として献納した。

それで教如上人から田尻道場の講中へ礼状が出された。この礼状の写しが杉谷（清水杉谷町）広善寺に残っている。

風巻の浄明寺は、本願寺縛如（しゃくにょ）上人の三男周覚法師の四男の祐存という人が田尻に草庵を営んだ。その後、草庵の跡をついだ日下部（くさかべ）西玄という朝倉氏の子孫が、織田信長の一揆征伐の時風巻へ逃がれ、藤谷の奥谷垣内（おくんたにかいち）に移った。

5. 周辺

- ・清水杉谷町、朝宮町、片粕町、竹生町、片山町、グリーンハイツ 9～10 丁目、ホープタウン田尻

□□□□□□□□□□



しみずっペディア 竹生町の伝承
清水東地区 竹生町（たこおちょう）

1. 村のおいたち

竹生（竹生町）は近くの片粕（片粕町）とともに、大昔から人が住みついた所である。昔の人は長尾山や、西裏、堂ヶ谷などの山の中腹に住んでいた。特に西側の西裏の所から土器の破片が水田の中から発見される。

竹生の地名については、昔若狭国丹生の浦（現美浜町）から、神様が「鮓（たこ）」にのって当地へお下がりになったので「タコウ」と呼ぶようになったと言い、昔は鮓を食べなかったという伝説がある。

また、竹が生い茂っていたので、「竹生」の地名が生れたともいわれ、タケフと呼ぶのを「タコウ」と訛ったとも言われている。

2. 薬師宮（やくしぐう）の由来

丹生神社は、むかしは薬師宮とっていて、薬師如来をお祭りしてある。今から千二百八十年ほど昔、泰澄大師が越知山奥の院で、一刀三礼して薬師如来をお彫りになられた。この尊像を竹生へお祭りになられ、氏神として村人の信仰をあつめていた。

その後、竹生（竹生町）にはこの薬師宮の別当寺院（べっとうじいん）として、七寺院と二か寺の下寺合わせて九か寺が建っていた。しかし、天正二年一向一揆に焼かれてしまった。

その頃、九か寺のあった所を「九坊田」といい、高十石、畑十八石が神田であった。

それから二年後の天正四年に、清水尻の鎚嚙（やりかみ）山城主村野源五郎景政の子景宗が、薬師宮を再建した。

その後百九年目の貞享二年の頃、大雪のために社殿が倒壊した。そこで福井藩主にお願いして再建することができた。三月八日から二十八日まで十日間、落慶式を行い、薬師如来をはじめ、時国天（じこくてん）・毘沙門天（びしゃもんでん）・川上神宮の御開帳を行った。

明治初年、薬師宮を「少彦根神社（すくなひこじんじゃ）」と改め、村社となった。また大正元年には丹生神社と社名を変えた。

3. 川上神社と朱（しゅ）の神様

御祭神は、「ニウズヒメ」即ち「水がね姫」といわれる。水がねは水銀のことで、水銀から古代の朱を採取する。朱は古代人の貴重な宝物で、朱は赤色の血の色であり生命の源である。古代人は死者の全身に、生命の源である血液に代る朱をぬると、永久に生命を保つという慣習が生れたと言われている。

丹生（丹生郡）の「丹（に）」は朱のことで、朱の産地であったと言われている。

竹生（竹生町）の丹生神社の社名は、この川上神社が朱を採る水銀（水かね）の神様「ニウズヒメ」を御祭神としているので、丹生神社の名がつけられた。

なお、近くの片粕遺跡（グリーンハイツ 4 丁目付近）から朱ぬりの皿が出土し、風巻（風巻町）の塚の越古墳から、朱の入った包みが出たことなどから、付近に朱の産地があったものと思われる。

また、竹生の吉田長兵衛家の後の赤土から、含有量の高い水銀が検出されている。

4. 大乘院（だいじょういん）と修験道（しゅげんどう）

竹生（竹生町）の南の猿が堂山に庚申塔（こうしんのとう）が建っている。この庚申様の石仏に「大乘院」という字が彫ってある。

この大乘院は三留（三留町）気比神社の別当寺院（べっとうじいん）で、奈良興福寺（こうふくじ）の門跡（もんぜき）大乘院と関係があったのではなかろうか。

また、猿が堂山の東には、修験道場があったと伝えられ、山伏（やまぶし）の修業の拠点として、

紫燈大護摩（ごま）の修法（しゅほう）が行われたと思われる。なお薬師宮の由緒書の中に「竹生には、修験道別当寺院が、あちらこちら薨（いらか）をならべ建っていて、毎年三月十八日越知山、七月十八日大和の大峯山（おおみねさん）へ春秋二度の入峯（いりむね）をし、右両院で二年毎に年番に登山修験を積んだ」と書いてある。

5. 猿が堂古墳

八大竜王の祭ってある猿が堂山の頂上に、五基の円墳がある。一番大きいのは、直径九メートル高さ二メートルである。古墳時代後期の古墳である。なお丹生神社の上には、直径二十メートル余りの円墳があり、大昔の豪族の墳墓と思われる。

6. どて仏（ぶつ）さま

村の中程に大きな地藏堂が建っていて、村の者は、「どて仏」と呼んでいる。昔ここに法雲寺の道場があったので、道場仏と言っていたが、どて仏と訛ったたのではないかとされている。承応二年・明暦三年など、今から三百三十年ほど前の地藏さんが安置されてある。

7. 検見坂（けみざか）

竹生（竹生町）の長尾山の北側に、検見坂という道がある。この道は、江戸時代に稲の作柄を検査するため、役人を案内した道で「検見坂」と呼んでいた。毎年同じ道で検査して、前年と作柄を比較するのであるが、なるべく日当りの悪い北側を案内して、年貢を少なくしてもらおうようにした。また高い所から田んぼを見ると、白穂（しらほ）が立っているのがよく見え、悪作に見えるので、竹生の検見道も、高い所の坂の上を通ったと言われている。

8. 坂鳥山（さかとりやま）

グリーンハイツの西側の、広域農道切り通しの峠に、鳥山と呼ばれる鴨猟（かもりょう）の猟場があった。

江戸時代に福井藩では、鴨をとる坂鳥山を指定して、この場所に限って鳥をとってもよい制度を設けた。

鳥の習性として、山と山の谷窪（たにくぼ）を越えて飛んでいくので「鳥越（とりごえ）」という地名が各地にあり、朝早く餌を求めて谷を渡っていくので、坂鳥といい、猟場を坂鳥山と呼ぶようになった。

この鳥越の峠の脇で「ばんどり」という四方搦（がらみ）の網を投げて鳥を捕えるわけである。ここは竹生（竹生町）と片粕（片粕町）の谷境で狭くなっていたので鳥猟（ちょうりょう）に都合がよく、土手をけずって猟場がつくってあった。

鳥猟はだれでもやれるわけではなく、鑑札を交付して運上銀（うんじょうぎん）（税金）を納めさせた。

9. 周辺

・三留町、田尻栃谷町、片粕町、清水町、和田町、グリーンハイツ2丁目

□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっぺディア 清水町の伝承
清水東地区 清水町（しみずちょう）

1. 村のおいたち

志津川が日野川に合流する要所で、村の後には、城山（じょやま）という高い山がそびえている。この山は水山と呼ばれ、山の麓に「清水」が湧き出ている。そして志津川の川尻にあたるので、「清水尻」と呼ばれるようになった。

古代人が早くから住みついた所で、近くの北堀（福井市）には貝塚があり、古代人の食べたシジミ貝や獣の骨が発見されている。

清水（清水町）の足高山（あしだかやま）には、十数基の円墳や前方後円墳がつくられてあり、古墳時代には豪族が住んでいたことを物語っている。

2. 八幡神社

朝倉氏の家臣の鎚嚙（やりかみ）城主、村野源五郎の守護神である。八幡神は、清和源氏（せいわげんじ）の氏神とされ、その後広く武人の守り神として各地に祭られるようになった。

3. 下の堂様（しものどさま）

日野川べりにお堂が建っていて、下の堂様と呼んでいた。この神様が或る年大水が出て流れてしまった。そして川下の東下野（東下野町）の者が拾いあげ、村のお宮さんの足羽神社へお祭りして置いた。

ところが、その後、清水（清水町）の村の者が返してくれるよう掛けあったが、東下野では神のおつげで、神様が早く清水へ帰りたいと言われるのを、無理やり金鎖でしばって置いてあると伝えられている。

4. 上の堂様（かみのどさま）

西谷垣内（がいち）の田島重左エ門家の後に、上の堂様が建っていた。

この堂様は、秋葉神社といい「ヒノカグツノオオカミ」という火の神様が祭ってあった。防火の神様である。明治時代のおわりに、神社廃合令によって八幡神社に合祀（ごうし）された。

5. 清水のわたし場

織田（越前町織田）・大森（大森町）・殿下（殿下地区）方面から、福井のお城下へ行くのに、必ず清水（清水町）のわたし場から舟にのった。ここから久喜津（久喜津町）・狐橋・笏谷（明里町付近）を通過して九十九橋からお城へ上った。

明治初年にここに橋がかけられ堅野橋（かたのぼし）といていた。この橋は、川巾だけに架けられた巾六尺、長さ十五間ほどの橋で、荷車なども通って便利がよくなかった。しかし洪水の時には水の下になり、破損したり流されることが多かった。

この場合、川上の各村々から分担金を集めて修理した。

大正四年になって、下天下（下天下町）－竹生（竹生町）－久喜津（久喜津町）と県道が変更され、久喜津橋が架けられ、この清水の堅野橋は使われなくなった。それで今まで僻村であった片粕（片粕町）が清水に代って交通の要所になった。

なお江戸時代には、三国湊から船で海産物が清水で陸上げされ、お年貢米は、ここで船に積んで福井の明里の米倉へ、御回米は三国の泥原新保へ送られた。また近村からの産物の薪・木炭・野菜・笠・むしろなどが積みこまれ、倉庫などが建っていて賑わっていて、千石船などが何艘も停泊していた。

6. 沈み石（しずみいし）

西谷垣内の奥の方の西山山頂に、沈み石という大きな岩が二個露出している。

この岩は、およそ千五百万年ほど昔の新生代第三紀・新第三紀中新世という時代に出来た地層の中に凝灰岩の石ころが混った安山岩質の岩石である。

千五百万年前にこの付近が湖の底であった頃、湖の出口近くで礫（石ころ）が堆積して、その上に安山岩質の土砂が積って固まった累積層である。

このように山の稜線に礫岩の入った凝灰岩質の層が見られるのは、珍しいので、清水町（旧清水町。現在は福井市）の天然記念物として指定されている。

なお、昔福井の殿様が浜へ塩浴（しおあみ 海水浴）に行かれた折、この岩に腰かけられ休けいされたので、「涼み石（すずみいし）」と呼んでいたとも言われている。

7. 清水古墳群

清水区（清水町）の東端足高山の尾根づたいに、十二基余の古墳がつくられである。日野川べりの揚水ポンプ場付近から崖を登りつめると、平地に高さ二・五メートル前後の円墳や前方後円墳があり、ここから尾根づたいに墳丘が続いている。前方後円墳は長さ四・五十メートルの大きな古墳で、古墳時代前期頃（紀元三五〇年―四百年）つくられた豪族の墳墓であると思われる。

また、火葬場の西側の尾根の突端に、珍しい典型的な前方後方分がある。

このように立派な大古墳が連なっているのは、この付近が早くから開けて、古代人が早くから住み付いていたことを物語っている。

8. 大野の飛地

日野川の川向いに清水（清水町）の飛地「大野」がある。古代からごく最近まで、日野川が曲っていて清水の地続きで、桑畠やヤナギが植えられていた。

明治四十五年頃日野川堤防構築と河川改修が行われ、日野川が真っすぐになって飛地となってしまった。そして今日では立派な水田となった

9. 志津川べりの囲い堤（かこいつつみ）

細坂峠の下の坂尻付近から、志津川が曲りくねっていて、少しの雨でも田んぼが冠水した。清水（清水町）では、この志津川の洪水を防ぐため、道をかき上げして堤防をつくって「囲い堤」をこしらえた。この「輪中（わじゅう）」は、鎌倉時代かそれ以前から、人力によって長い年月をかけてつくられた大きな遺産であった。

このため、他村では水害によって飯米（はんまい）にも事欠く年が続いても、清水の輪中は水害を受けないことがなかった。

10. 周辺

- ・片粕町、竹生町、和田町、細坂町、安田町、西下野町、久喜津町
- ・城山
- ・市指定文化財（天然記念物） 鼓岩

□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっペディア 和田町の伝承
清水東地区 和田町（わだちょう）

1. 村のおいたち

和田（和田町）の村前一部は、志津川が屈曲していて、昔から水害になやまされていた。大昔はこの辺は沼地で大木が茂っていたので、水田の下二メートル位の所に、周り四・五尺の大木が折れ重なって、泥炭化（でいたんか）しかかっているとのことである。

そのため、大昔は小谷山の高台や、本堂（本堂町）地籍の堂が谷などに住んでいたのではないかとと思われる。

宝暦十一年、今から約二百二十年前の村明細帳に、堂が谷の田地三百十五石を出作している。これは三十町歩余りの水田を、和田の者が耕作していたことになり、この堂が谷に和田の者が住んでいたのではなかろうか。

この出村には、神社やお寺があつて栄えていたが、天正年間織田信長の時代、一向一揆のために焼き払われ、村人たちは親村の和田へ帰ったので、戸数も九十一軒にふえた。

その後、この堂が谷の山だけ残して田地は売り払い、下天下村（下天下町）の北の方の田地と、竹生村（竹生町）の志津川べりの田地十町歩余りを買取ったとの言い伝えがある。

なお、江戸時代には細坂で四十石、羽坂で五十石、末で五十石、更毛で五十五石も出作していた。堂が谷と合わせて、五百十五石も出作していたことは、村前の田んぼが毎年洪水で、ほとんど水腐れになって、米がとれなかったことを物語っている。

和田という地名は、アイヌ語で「葦（あし）の生えている所」という語源であるともいわれ、県内の和田という所は、湿地帯で奥まった所が多い。村ばなの下天下境に「さる屋」という地名があり、猿がたくさんすんでいたので「猿和田」といつていた。昭和三十年町村合併によって清水町（旧清水町）が誕生した時、「猿」の字をとって「和田」と改められた。

2. 春日神社（かすがじんじゃ）

御祭神は、武甕槌尊（たけみかずちのみこと）・経津主命（くつぬしのみこと）・天児屋根命（あめのこやねのみこと）の三柱の、御神像が祀つてある。このほかに秘仏元三大師（がんざいだいし）と十一面観音・地藏菩薩・阿弥陀如来など四体の像が安置されてある。

昔の拝殿は茅葺（かやぶき）屋根で、三間半四方の大きな広間で、若連中の集会場としてつかわれていた。

3. 庚申塔（こうしんのとう）

春日神社の西の方へ返った山の中腹に、庚申塔が祭つてある。元禄十四年今から二百八十五年前の二月二日、猿和田（和田町）の田村伝兵衛という人が寄進した珍しい塔である。高さ一・二メートル余りの笏谷石（しゃくだんいし）に、青面金剛（しょうめんこんごう）という荒神様（あらがみさま）と、二匹の猿、二羽の鶏が彫つてあり、荒神様が天邪鬼（あまのじゃき）をふまえている。

この塔とよく似た塔が、近くの下天下（下天下町）・竹生（竹生町）にも安置してあり、やはり元禄年間に建てられた塔である。その当時、このあたりで庚申信仰が行われていたものと思われる。

4. 専光寺・泉通寺道場

和田（和田町）の字坂元町の山裾に福井市下野（東下野町）の専光寺道場がある。この道場の上に地藏堂が建つていて、小さい地藏が何体も集められてある。

昔、この辺一帯の山裾に家があつたものと思われる。

専光寺道場は上（かみ）の道場といい檀家（だんか）は十四軒である。

村の中央に、福井市若杉泉通寺の道場があり、檀家は十九軒で、下（しも）の道場と呼んでいる。

5. お灯籠囃 (おとうろうなわて)

和田 (和田町) の中町に天台宗の大きな寺院があった。飲み水を三百メートルも奥の山から引いたので、今でも一・五メートルほどの溝が残っている。寺の下の参道は、横山弥三平家の前から、村の入口まで続いていて、両側には何十本も大きな灯籠が、列をなして建っていたので、お灯籠囃と呼んでいた。字名に「おとろ」という地名があり、近年の土地改良の時、その灯籠の残片がたくさん出土した。

6. 町という字名

和田 (和田町) には「町」という字名が一か所に集中してつけられてある。和田から本堂 (本堂町) へ通じる道の峠の下を坂下町・大谷町・大古谷 (だいごたに)・南谷町・宮町・苗代 (なわしろ)・坂元町・中町・下町・谷町と順に町の名がついている。このあたりに人家が密集していて、町がかった所であったと思われる。それぞれの地形にあった町名で、昔、天台宗寺院があった頃、お灯籠囃の方の方に栄えていた門前町の名残かもしれない。

7. 木田庵寺の石塔

下天下 (下天下町) の村端の高台にあった木田庵寺が、天正年間一向一揆の兵火にかかり、焼かれてしまった。この寺跡から多くの石塔の破片が出土した。この山の持主谷口彦右エ門さんが、貴重な遺物として、和田の金比羅宮 (こんびらぐう) の西側にある自家の基地へ移した。宝篋印塔 (ほうぎょういんとう) や五輪塔などの残欠である。

8. 越知山参り道しるべ

元和田分校の前に、越知山大谷寺への「道しるべ」が立っていて「みぎおち道」と書いてある。

この道は、福井の御城下から清水尻 (清水町) の渡しを通過して、和田 (和田町)・天下 (上天下町)・下天下町・大森 (大森町)・野口 (笹谷町の一部)・大谷寺 (越前町大谷寺)・越知山へと通ずる最もにぎわった越知山参りの道であった。

昔は、越知山祭りや大谷寺のお開張 (かいちょう) には、善男善女の列が続き、また年中越知山参りの信者が、道しるべを頼って道を急いだと言われている。

この道しるべは、和田分校廃止の後、近くの用水路の脇に移された。



9. 堂の講とお講様 (どのこうとおこうさま)

神社の前に一反半の神田があり「堂田 (どうだ)」と言って、毎年貢米を持高によって分配し、無高の者には一升を分けるようにしていた。そして、十二月九日の山祭りの日に、この米で御飯をたいて「ゴセン様」を盛って神様へお供えして、豊作を感謝し家内安全を祈願した。この風習もすたれて、近年は年貢も金で分配するようになり、昔からの美風もなくなった。

また、道場にはそれぞれお講様があって、男講 (おおこう)・女講 (あまこう)・若講の年令・性別のお講様が毎月行われていた。お講様には「お勤め」をあげて食事をして、そのあとお説教や座談をして、お互いに心の交流をはかっていた。しかし現在は、下の道場の男講だけになってしまった。

10. 周辺

- ・上天下町、下天下町、竹生町、清水町、末町、本堂町、細坂町

□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっぺディア 小羽町の伝承
清水東地区 小羽町（おばちょう）

1. 大昔の小羽

清水町役場前（旧清水総合支所）から、弥生時代の土器が出土している点、また通称「後山（うしろやま）」（お城山）に前方後円墳が造られていることなど、これらのことを合わせ考えると、かなり権威をもった首長一族が住んでいたと考えられ、小羽（小羽町）には早くから人が住みついていた事がわかる。

2. 今井神社

明治三十九年、八幡神社と今井神社とを合併して建立されたものである。

このうち八幡神社ご祭神は、木曾義仲の守り本尊の八幡大菩薩を今井兼平がまつたもので、御神体の裏側に「朝日將軍守神 兼平配暢（はいちょう） 元暦元年」とある。

今井神社のご祭神は、衣冠束帯（いかんそくたい）の平安時代の貴族の正装をしているお姿で彩色されている。兼平の死後四百五十年余りたってから、小羽村（小羽町）の人が神社を建てて、「今井神社」と名付けてまつたものと思われる。



3. 茶臼山権現（ちゃうすやまごんげん）

小羽（小羽町）のがらがら山の山頂にある円墳上に、薬師如来（やくしにょらい）がまつられてある。この山頂は、茶をひいて抹茶をつくる石臼の形をしているので「茶臼山」と名付けられた。

約一メートルに一・五メートルぐらいのお堂である。仏像は高さ四十五センチメートルほどの坐像で八重の錬弁台座（れんべんだいざ）（はすの花びらの台に座っておられる）の上に安置されている。

4. 福昌院

小羽（小羽町）の村ばなに、明治時代まで福昌院という修験道山伏の家が建っていた。江戸時代は医療機関が発達していなかったので、加持祈祷（かじきとう）、まじないが行なわれていた。

また「祭り」は庶民の唯一の娯楽であり、そして家内安全、五穀豊じょうの祈願が行われたため、山伏が祈祷師として重宝がられ、近在のお祭りに招かれた。

5. えんしょう谷

小羽（小羽町）の南山裾の谷を「えんしょう谷」と呼び、そこに住んでいた荻原謙家を「えんしょう」と呼んでいる。明治初年の村地図には煙硝（えんしょう）を「園荘」とあて字が書いてあるが、江戸時代に鯖江藩の火薬工場があった所である。

6. 後山（うしろやま）前方後円墳

後山の山頂に、全長四十四メートル、後円部の径二十五メートル、高さ二・五メートルの大きな古墳があり、紀元四〇〇年ころの首長の墓である。

この付近に権力を持っていた豪族がいて、自分の権力の偉大さを誇示するためにつくったらしい。

7. 小羽古墳群

清水町役場（旧清水総合支所）の後の山一帯に二十数基の古墳群があることが考古学全集に記されている。

後山の前方後円墳のほかにも、えんしょう山尾根に円墳二十基がある。

8. 坪の内

今井神社付近に「坪の内」という地名がある。奈良東大寺の荘園「椿原庄（つばきはらのしょう）」の条里制の遺跡の名残であるといわれている。

9. 石塔

後山切り通しの墓地入口に、文化八年（約百七十年前）親鸞聖人五百五十回忌記念報恩の笠塔が建っている。

10. 黒坊主

小羽（小羽町）から風巻（風巻町）に通ずる山裾には、黒坊主が出ると、こわがられた。現在地藏が建てられている。

11. 笠ぬい座づけ

冬の農閑期の副業として男にかわって、村中の女性が笠を縫った。一時でも笠を縫う時間を与えるため、男が食事の準備、後片付け、洗濯、育児までした。秋のとり入れがすむと笠縫場に笠仲間が集って、宿の者を招待して、ごちそうを作り仕事をはじめた。これを座づけと言っていた。笠縫場は垣内（かいち）で特定の家がきめられ、競争で作業をした。

12. 荻原 満（みつる）

明治十七年に生まれた。幼少の頃から学才にすぐれ、学問に精進した。

上京して医学を志し、済生学舎に学び、十五歳で医師の検定試験に合格したが、未青年のため開業できなかった。

後に開業したが、患者には献身的に努力したので信頼があつかった。とくに、「ルイレキ」（頸線結核）には手術をせずに治す独特の治療をしたので、北海道や九州方面から多数の患者が来た。

また、天津小学校（清水南小学校）の校医として、児童のトラホーム患者の治療、予防手当には、最善の努力をしたので、県下でも類のない成果を修めた。

13. 周辺

- ・ 上天下町、下天下町、三留町、風巻町
- ・ 旧清水総合支所
- ・ 県指定文化財（史跡） お城山古墳
- ・ 市指定文化財（史跡） 小羽山 30 号墓



しみずっペディア 真栗町の伝承
清水南地区 真栗町（まくりちょう）

1. 春日神社（かすがじんじゃ）

真栗（真栗町）には、祭神三柱（はしら）神社（天津郵便局の上）・三柱神社（旧真栗集会場の奥の山）と八幡神社（現在の春日神社）の三つのお宮があった。

しかし明治四十年に神社廃合令によって、各村にあった氏神様を合併して、一村一神社にすることとなった。

そこで真栗にあった上・中・下の三社を下の八幡神社に合併して、天津神社と神社名をつけた。ところが他の村から「天津」という神社名は、天津村（おおよそ今の清水南地区）の神様と混同されるとの異議が出されたので、春日神社と改めた。

2. 旧八幡神社

御祭神は、神功皇后（じんぐこうごう）・応神天皇（おうじんでんのう）をお祭りしており、昔は、お薬師さんと呼んでいて薬師如来の坐像が安置されている。この薬師如来像は、清涼寺式の仏像で、頭の螺髪（らはつ）が、三つあみにした仏像の髪を、ぐるぐる巻きにした清涼寺式という形で、珍しい仏像である。昔の氏子は、下組の三十戸であった。

3. 旧祭神三柱（みはしら）神社

中垣内の氏神様で、応永三十四年今から五百六十年ほど前の室町時代始め、上川去（越前町上川去）に別荘を持っていた飛鳥井中納言雅縁卿（あすかいちゅうなごんまさよりきょう）が、五十四歳の春、自分の荘園のあった越前田上川去へお出になった。

その時天王の牛頭（ごず）天王宮に七日間参龍（さんろう）され、その時、真栗に三柱の神様をお祭りした。その後、豊臣秀吉公もお参りになり、社地一畝十歩を寄進された。

昔の氏子は、中組の二十戸であった。

4. 旧三柱神社

上垣内の御所ヶ谷にあり、氏子三十五戸であった。

この神社は、元正天皇の時代（一二四〇年ほど前）に、天皇の詔（みことり）によって、全国に神様をお祀りするようになり、真栗（真栗町）に三柱神社が建てられた。

応永三十四年に、飛鳥井雅縁卿（あすかいまさよりきょう）が天王（越前町天王）の牛頭（ごず）天王へお参りになられた時、真栗の三柱神社にも参詣された。この折余りにも有難かったので、和歌をおよみになり、「この神は都の花や恨むらん 遠く越路の山めぐりして」と、このような有難い神様は、京の都にはないと歌われ、ご自身の守り神となされた。

5. 善蓮寺（ぜんれんじ）

真栗（真栗町）の「たるみ」という所に、善蓮寺という浄土宗のお寺があった。このお寺は、坪谷（坪谷町）出身の奥村小作という人が、明治二十四年に建てたお寺である。

この奥村という人は、子どもの時から賢くて学問も偉く、大きくなって近郷にない宮大工となり、神社や寺の建築を手がけた。そして多くの弟子を養成した。

その後、僧侶となって垂海（たるみ）に、浄土宗の善蓮寺を創設し住職となった。そして病人には鍼・灸（はり・きゅう）などを施し、参詣する信者が多かった。遠くは四ヶ浦（越前町四ヶ浦）方面からの信者が特に多かった。

大正五年、五十歳の若さで亡くなった。門人たちは遺徳（いとく）をしのいで、高さ一・八メートルの八角形の記念碑を、大きな岩の上に建てた。

善蓮寺は、昭和二十五年に焼失したが、地蔵堂だけ残った。この地蔵堂には、丈六の大きな石地蔵

を中心として、千体の石仏が安置されている。この石仏は信者の寄進したお地蔵さんで、それぞれ名前が書いてある。

6. 御坊啜（ごぼうなわて）と御坊水

真栗（真栗町）の沖田に三十五歩という所があった。このあたりは畦（くろ）という岡が続いていた。むかしこのあたりに人家があったが、飲み水がなかったので、真栗の中ほどにあった御坊水を汲みに来た。この道を御坊啜と呼んでいた。

また御坊水を飲んでいる家が五、六軒あって、この近くに日鑑（にっかん）上人の生家西野金三郎家があった。またこの屋敷に、善道寺というお寺があったが、その後大野へ移った。その寺跡を今でも善道寺と呼んでいる。

7. 岡の道

江戸時代に岡島甚左衛門家の祖先が、米商いをしていた。清水山（清水山町）の大池で伝馬船（てんません）という底の浅い船に積み、「よもぎ」の船付場で千石船に積み替え、三国湊へ送っていた。真栗（真栗町）から大池まで米を運ぶ道がつけられ、岡の道と呼んでいた。

8. サガ山・御所が谷・乙女谷

真栗（真栗町）のサガ山は、三岩山とも書き安山岩の岩山である。サガとは「さがしい」（けわしい）という意味で、この山は急な崖山である。この岩山の東側に石切場があり、このあたりから西の方一帯を「御所が谷」と呼んでいる。

また、サガ山の西側は急な崖で、坪谷（坪谷町）地籍のサガ山に続いている。そして坪谷入口の谷窪（たにくぼ）に「乙女谷」という真栗の飛地がある。

この乙女谷に次のような伝説が残っている。

むかし、サガ山城主に使われていた娘が、城主の大切な抹茶の天目茶碗を割ってしまった。それで打首になるのを恐れて逃げたが、追手が乙女谷まで追っかけて来たころ、娘を見失ってしまった。この時、娘はこの谷の大きな岩に隠れていたもので、見つからなかった。それでこの岩を「かかえ岩」と名づけたとのことである。

9. 検見（けみ）道と馬原（うまばら）

江戸時代に年貢を取り立てるため、稲の作柄を役人が検査をして回った。これを「検見（けみ）」といい、この道を検見道と呼んでいた。

真栗（真栗町）の南診療所（現在は清水南醫院）付近に、検見役人の馬をつないで置いて、ここから清水山（清水山町）境の「ぎやるが池」の道をカゴに乗り替えて見て回った。それでこの馬つなぎ場を「馬原（うまばら）」といい、作柄を見て回った道を「検見道」と呼んでいた。

稲の作柄は、低い所から見ると稲の穂の下がったのが豊作に見え、高い所から見ると白穂が立って見え、悪作に見える。それで役人の乗るカゴの窓を、なるべく高くして置いたとのことである。

10. 周辺

- ・山内町、御油町、島寺町、清水山町、坪谷町
- ・清水南小学校、マイドーム清水
- ・ふくい健康の森
- ・鳥ヶ岳

□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっぺディア 御油町の伝承
清水南地区 御油町（ごゆちょう）

1. 地名といわれ

朝日町天王（越前町天王）の八坂神社の応神寺にお灯明（とうみょう）を奉納したことから、御油（ごゆ）の地名が生れたといわれ、一説によれば、太閤秀吉に種油（たねゆ）を献上したともいわれ、また隣村の島寺（島寺町）にあった「四万寺」のお灯明油をつくった村であったとの言い伝えもある。

むかし、油をしぼったときの重り石だといわれている米俵型の大きな石が、公民館の横に一つ残っている。

御油区（御油町）は日野川沿岸の肥沃な平野がひらけ、西は標高一〇〇メートル余りの山を背に、その東山麓一帯に住居が散在している。区の南に広がる麻畠（あさばたけ）という地籍一帯から須恵器の破片や石斧（せきふ）が発見されている。五百五十年前に、天王川の水をかんがい用水として使う「水番制度」があったと伝えられている。

2. 白山神社

明治末期までは、南宮谷と北宮谷にそれぞれ神社があったが、明治三十九年神社廃合令で北宮谷の白山神社に合併された。

この神社には笏谷石（しゃくだにいし）でつくった小さい狛犬が百個ばかりあるが、願ごとが成就するように奉納されたものと思われる。

また、数十本の角力（すもう）の大関御幣（ごへい）が残されている。これは、明治・大正・昭和のはじめにかけて、夏祭りに村の若い衆が他村の夜角力で大関に勝って意気揚よう持って帰った栄誉の印で、一本一本に勝った力士の名前が書いてある。

3. 正願寺

文正元年八月三日蓮如の弟子空珍（くうちん）がたてたものであると伝えられている。

太閤検地で「除地（じょち）」（年貢や夫役をかけない土地）になった古文書は対照十五年の大火のときに焼失してしまった。

天和元年大谷派本願寺百ヶ寺が西本願寺へ転派するという大騒動（百ヶ寺大騒動）があつて、この時正願寺は東本願寺から西本願寺へ転派した。

正願寺の創建は五百年程まえであり、現住職で三十代にあたる。

4. 天王川用水と水害

五百数十年前にすでに、天王川用水の水番制度があつて、約六キロメートルの水路を通して、御油（御油町）三百石の水を引いた。

御油は、七郷用水組合の一番北にあたり、戸数の小さい村で、一番長い水路を管理する苦労は大変なものであった。

早ばつ（かんばつ）には、水源も細く、ろう水、盗水（とうすい）になやまされ、桑畑にカヤをつけて、寝ないで水番をしたり、洪水が伝えられると、村では一本太鼓をたたいて急をつけて、村中で古畳や古俵を持って水止めにつとめた。

5. 火災と災害

天保飢饉のときには五年間も苦しい生活が続き、墓地をみると死者が多かったことがわかる。

明治三年の島寺（島寺町）、御油（御油町）の大火事、明治十八年六月三十日から七月二日までの大暴風雨の水害、明治二十年一月の大雪、大正十五年四月二十日御油の南端から出火した火は、御油、島寺計九十二戸を全焼した。

その上、二名の焼死者、三十九名の負傷者を出した。悲惨さがしのばれる。

御油では毎年四月二十日を大火記念日として、村中総出で防災、消防の演習訓練を行なっている。

6. 竹内宇市

明治十二年七月六日生まれで、十四歳で坪谷（坪谷町）の大工奥村小作に弟子入りした。

二十五歳で福井市緑川町にある浄土宗中本山安養寺の本堂を新築した。のちには真栗（真栗町）善蓮寺本堂、御油（御油町）正願寺本堂、南条郡塚村宇津尾（うつお）のお寺を新築した。

彼は神社、仏閣の建築に精魂を傾けた。その技術は卓越して、その優秀さは万人が認めたが、昭和十一年十月二十七日五十八歳で死去した。

7. 竜溪（たつたに）玄義

明治十七年三月十一日、正願寺住職竜溪行恩の長男として生れ、第二十九世住職になった。

福井第二仏教中学、東京国学院大学予科を卒業、明治四十一年三月、京都本山立清国開教練習所を卒業と同時に教師になったが、同年に開教師に任ぜられ、清国開教師漢口駐在を命ぜられた。

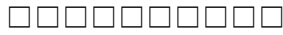
四十三年九月には、上海に転勤、大正元年八月には、ウラジオストックへ転勤、さらに大正二年八月、ハワイへ転勤、大正十三年まで十一年間ハワイ布教に尽力した。

帰国後、昭和四十八年十月四日、九十歳の天寿を全うするまで剛毅寛容をかね備えた人徳と、卓越した識見は世人の信望をあつめた。

また自費を投じて、託児所・日曜学校を聞いて幼児少年の育成、仏教婦人会を創設して社会教育に努力するなど常人にはできない業績を数多くのこした。

8. 周辺

・真栗町、島寺町、清水山町



しみずっぺディア 島寺町の伝承

清水南地区 島寺町（しまでらちょう）

1. 地名といわれ

村の前一帯は、大昔は湿地帯で、よく大水がついて泥の湖のようになった。そして何日も水が引かなかったそうである。

この湖の中にいくつもの島があったので、島寺という地名が生れた。そのころは、経塚山の中腹の台地や龍雲寺（おっさま）の台地や白山神社や、浄福寺などの奥の谷が、住居であったらしい。地名として残っているものに、向島（むかじま）・北島・沖・丸島・柿の木島・竹島（たかしま）などがある。

伝説としては、泰澄大師が四万体自の仏像をつくって安置されたので「四万寺（しまんでら）」といい、「島寺」と呼ぶようになったという。

2. 八幡神社

新光寺（片山町の一部）の八幡神社が洪水の時、島寺（島寺町）の向島（むかじま）に流れついたことが三回もあったので、社殿を建てて安置した。

向島の木下甚兵衛家後ろの田んぼの中にあつて、近在の七、八名共有の氏神であった。明治四十年十月神社廃合令によって白山神社境内に移された。

3. 浄福寺

三百年余り前、朝日町栃川（越前町栃川）の円福寺の第十代の円淳（えんじゅん）という人が、浄福寺を建ててここで亡くなった。弟子の智専は才学に秀で、門信徒を教化した。その子専入があとをつぎ今日に至っている。

明治十六年一月、大正十五年四月の二回の火災のため、寺宝、什物（じゅうもつ）、経巻などが焼けた。

4. 龍雲寺（りゅううんじ）

三百六十年ほどむかし、福井藩主、忠昌公が越前転封（てんぷう）のときからのゆかりある寺であるが、しばらく無住になっていた。

のちに福井市小山谷（小山谷町）の瑞源寺（ずいげんじ）大忠徹和尚（てつわじょう）が中興（ちゅうこう）されたが三百十年前、又無住となり、一部御堂を残して、今日に至っている。管理は島寺（島寺町）区民の一部が受けもち、不動産から得る収入は瑞源寺へ納めている。

5. 島寺古墳群

経塚山（きょうづかやま）の頂に円墳五基が確認されている。直径十五メートル位、高さ二メートル前後の低い古墳で、一番大きい古墳上に陸地測量部の三角点がたっている。

6. 経塚山（きょうづかやま）

泰澄大師が創設した四万寺（現龍雲寺の南から、白山神社にかけての山の中腹にあったのではないかと伝えられている。）が廃寺になったとき、経典を埋めたので経塚山と呼ばれている。

7. 向島・竹島

向島の地下には砂利層が続いていて、古代の大木が埋没されている。最近一万五千年以前の「サンチュク」と呼ばれる埋没林の一部が発掘された。

竹島は一面篠竹（しの竹）におおわれていたところだと言われている。

8. 追分けの地蔵さん

島寺（島寺町）の追分けにある石堂（いしど）の地蔵さんは、蓮の葉にすわっておられる地蔵さんで「荷葉（かよう）地蔵」と呼ばれる珍しい石仏である。

9. さんまん堂

死者のめい福を祈るお堂で、その横に火葬場があったが今は墓場になっている。
ここに年中きれいな湧水が出ていて、重病人はこの水を一口飲んで死にたいと言ったという。

10. 修智（しゅうち）小学校跡

明治七年から四十三年まで、野尻静家の東川端に修智校が建てられてあって、御油（御油町）・島寺（島寺町）・風巻（風巻町）・小羽（小羽）の小学一年から四年までの児童が通っていた。

11. 丘みどり

本名、木下ヲシナ、明治四十五年、木下孫兵衛家に生れた。宝塚音楽歌劇学校に入学、昭和二年に同校を卒業した。そして芸名を丘みどりと言ひ、歌劇団星組の女優として、男役・洋装のスターとして多くのファンを持ち、理智的な容貌と持ちまへの勘と、頭のよさから頭角をあらわした。プログラムや脚本集、主婦の友などの巻頭を飾る写真などに掲載された。

12. 野尻東内

大村の島寺（島寺町）で、大高持ちであった野尻市左衛門の長男に生れた。天王川がよく氾らんしたので、その度に彼の座敷の畳を持出させ、在田（在田町）へ運んで立並べて水害を防いだと言う。野尻家は代だい庄屋をつとめ、県会議員に四回も当選したり、北陸新聞の株主になって活躍した。

13. 周辺

- ・大森町、山内町、清水杉谷町、真栗町、御油町、風巻町、片山町、清水山町
- ・清水中学校、きららパーク（ふれあいドーム、テニスコート）
- ・市指定文化財（彫刻） 木造観世音菩薩座像

□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっペディア 風巻町の伝承
清水南地区 風巻町（かざまきちょう）

1. 地名といわれ

風が巻きこむという意味から風巻の地名ができたらしい。小羽山とかみ山にはさまれた谷 あいで、北風はもちろん、南風もはげしく巻きこむ所にあたる。

大むかし（一二〇〇年以前）すでに風巻村（風巻町）に牧場があったらしいことが古書に記されているなど、むかしから開けた村といえよう。

2. 日吉神社

この社一円は杉の老木が茂り、昼でも暗いので、村人は聖地（たつとい土地）だとして入山をひかえた土地である。

ある日越前国河和田（鯖江市）の住人、重次郎・森之助兄弟が数十名の木こりといっしょに風巻（風巻町）へ来て、連日酒樽（酒を入れる木の入れもの）用の材木を伐採した。

ところが、ある夜木こりの兄弟の枕元に白髪の老人が現われて言うには「わが住居を荒らすことなかれ」と言ってスーッと消えた。このことはそれから後もたびたび同じことがあったので、木をきる事を中止して、社殿を建てて日吉神社と号して日吉大神を祭った。

3. 白山神社

千百五十年前にまつられた杜であったが、織田信長時代に兵火にかかり焼失した。のち元和二年（一六一六年）に今の地へ造営した。

4. 地藏堂（斉藤清兵衛家氏神）

伊藤恵造家の溜池を掘ったとき地藏菩薩が出たのでその石像を社殿にまつた。

5. 浄明寺

開基は本願寺綽如上人の三男周覚法師という人の四男の祐存で、田尻に草庵を営んだ。その後朝倉氏の子孫日下部西玄が、住職となり跡をついだが、織田信長の一揆征伐の時、風巻（風巻町）へ逃れ奥谷垣内（おくとんがいち）に移った。

その後、江戸時代になって風巻が福井藩の家老稲葉妥女（いなぼうねめ）という人の知行地（領地）になった時、大谷に寺屋敷と山一か所の寄進を受け、寺を再建した。それで、元禄二年に、稲葉妥女の墓を建て、毎年命日には墓参りを続けているとの事である。

6. 乱れ橋

八百年のむかし、小羽（小羽町）から風巻へ通じる橋の所で、木曾義仲の軍と平家方の軍と戦った。ここは沼地で義仲軍が苦戦し大混乱となったので、その後、乱れ橋と呼ぶようになった。そしてこの橋の下の魚は片目であったという。

この橋も最近の土地改良工事でなくなって今はない。

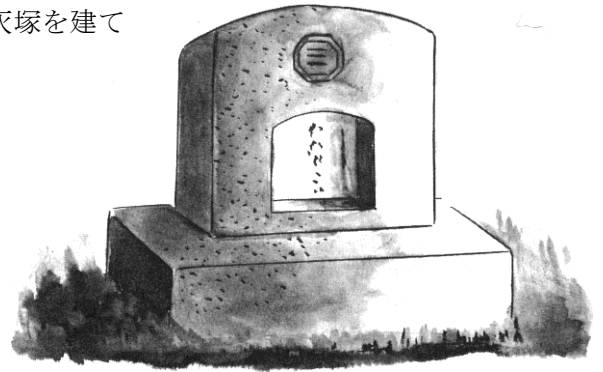
7. 塚の越し古墳（つかのこしこふん）

町営グラウンド（きららパーク多目的グラウンド）の敷地内にあつて、高台に築かれた円墳であった。この円墳の近くでむかしは瓦焼きをした。この辺の赤土は瓦に適した粘土地帯であった。

古墳からは、冠頭太刀（かんとうち）・管玉（くだだま）・朱（しゅ）などが出土して東京国立博物館に陳列されている。

8. 灰塚（はいづか）

風巻（風巻町）の西火葬場の墓地に「灰塚」が四基たてられている。天保・文化・文久時代、村の有志によって建てられたものである。飢饉・はやり病によって一時に多くの死者がでたので、大量の骨灰の処理に灰塚を建て丁寧に葬ってある。



9. 明寺の地藏堂

明寺橋東北づめのあたりは、むかしは杉・松の大木が生い茂り、昼でも暗い気味の悪い道であった。特に風巻（風巻町）の火葬場が近くにあり松の木から、首つり縄が下るとのことで小走りで通り過ぎた。

明治十年ごろ、風巻の有志、杉崎郡内・斉藤勘太夫・酒井忠右エ門の三人の寄進によって、通行人の心を安める護り本尊として、石造地藏菩薩を安置した。

10. 斉藤清兵衛

明治十年二月八日風巻村（風巻町）の素封（そほう）家に次男として生れ、幼名を清といった。明治三十七年父の隠居により家督を相続して清兵衛を襲名した。

彼は福井中学を経て、東京高等商業学校に入学したが病気のため中退した。のちに慶応義塾大学の理財科に入学したが、ここでも病気のために中退し、風巻で療養した。

正義感、責任感が強く、県会議員として十年、村長（旧天津村村長）を十一年、その間の村民の信頼は絶大であった。

11. 織田信博

慶応二年十一月風巻（風巻町）の織田信三の長男として生れた。幼少から学問を好み、教員になったが、明治四十二年から四十五年まで村長として活やくした。

在職中に天津小学校（清水南小学校）を真栗（真栗町）に建てるなど、厳然（げんぜん）とした態度で立ち向った。また福井・西田中間のバス路線開発にも献身的に努力した。彼は一生を通じて公共事業に貢献して偉大な業績をのこした。

12. 周辺

- ・大森町、三留町、清水杉谷町、島寺町、小羽町
- ・清水南公民館、清水図書館、清水郷土資料館、きらら館、きららパーク（多目的グラウンド）

□□□□□□□□□□



しみずっペディア 片山町の伝承

清水南地区 片山町 (かたやまちょう)

1. 村のおいたち

村の西側に山が連なって、その片側に村があるので「片山」と呼ぶようになったのである。

この後の山を「牛山」と書いてある文書もあるが、小谷山と呼ばれる山から流れる湧水や、出水を溜池にためて、この水で田んぼを養ってきた。そして、村前を流れる日野川の洪水のため、山の谷あいの高い所に住んでいた。それで谷ごとに小さい村ができて、椿井 (つばい)、牛房谷 (ごぼたん)・大谷・小谷・鳥越 (とりごえ)・新光寺などの垣内 (かいち) が散在 (いずれも現在は片山町の一部) しているわけである。

そして、濯概用の溜池として、三ツ谷の大溜をはじめとして、小谷溜、名ノ谷溜、奥ヶ谷溜などがある。

2. 蔵王神社 (ざおうじんじゃ)・雄剣神社 (おつるぎじんじゃ)・白山神社

片山 (片山町) には、白山・蔵王・八幡・雄剣・姫剣 (めつるぎ) の五神社が建っている。明治三十九年の神社廃合令の時、合併しなかった訳である。

その中で蔵王神社は、白山信仰に関係する山岳仏教「修験道」の神様の、蔵王権現が祀られている。

また、雄剣神社には、越知三所 (おちさんしょ) 大権現の十一面観音・阿弥陀如来 (あみだによらい)・聖観音 (しょうかんのん) の三体の仏像が祀られている。

白山神社には、珍しい立派な御神像が祀られている。この神様には、元徳元年十月廿日という銘 (めい) が書いてある。今から六百六十年ほど昔の、後醍醐天皇の時代につくられた神像で、清水町内 (清水地域内) の銘入りでは、最も古い木像である。

3. 東大寺荘園椿原庄 (とうだいじしょうえんつばきはらのしょう)

片山新光寺 (片山町の一部) の西側一帯は、奈良・平安時代に、東大寺の荘園であった。この荘園を「椿原庄」と呼んでいた。

東大寺正倉院文書に「東大寺諸国庄々文書並絵図等目録」という文書があり、越前国丹生郡椿原村に東大寺の荘園があったことが記されてある。

この椿原庄は、その頃の条里制によって、十八条一里、二里、十九条一里、二里の位置で、面積は十七町歩余りである。

片山 (片山町) には、椿井という垣内があり、椿原のお寄りという祭りがある。また各所に大きな椿の木が生えていたので、椿原庄は、新光寺付近に間違いなことがわかった。そして南の方は新保付近、西の方は 島寺 (島寺町)、風巻 (風巻町) 付近、北の方は杉谷 (杉谷清水町)、三留 (三留町) 付近にまたがっていたものと、推定される。

4. 西光寺の板碑 (いたび)

墓地の入口に、高さ一・八メートルの大きな板碑が一对立てられてある。そして梵字 (ぼんじ) の報身真言 (ほうしんしんごん) が薬研彫 (やけんぼ) りで彫られてある。左の隅に永正七年と彫ってあることから、室町時代の中頃、一向一揆の争いに犠牲となられた方々の、供養碑であるとの言い伝えと一致する。

この板碑は、もと新保 (清水山町の一部) と片山 (片山町) の村境の谷窪 (たにくぼ) に建てられていて、四方に境界石が立っていた。これは永正三年 (今から四百八十年前) 森田 (森田地区) 付近で、九頭竜 川をはさんで一向一揆方と朝倉勢とが戦った。この時一揆方が敗れて、多くの人が捕えられ処刑された。

朝倉方の家臣増井氏の館が、新光寺 (片山町の一部) にあったので、捕りよの処刑を命ぜられたのではないかと、推測される。その後、永正七年に増井氏や土地の有力者によって、追善供養の板碑を

処刊場跡に建てたという、言い伝えが残っている。

当時このような碑を建てるには、相当の費用がかかったものと思われる。

終戦後、耕地整理の時、この板碑は西光寺墓地へ、四隅に立っていた堅石（たていし）は、寺の門前に移された。

5. 八幡神社の古式鳥居

この鳥居は、慶長十八年、今から三百七十年ほど前に建てられた、古い笏谷石（しゃくだんいし）の鳥居である。

鳥居の柱に、年号と石大工千助という名前が彫ってある。江戸時代以前の鳥居を古式鳥居と呼び、荒けずりの素朴な美しさがある。

江戸時代になって鳥居の木割（きわり）法ができて、柱、貫（ぬき）笠などの大ききの規格がきめられ、均衡のとれた形となるが、画一的で、笠木などの反りが不自然になりやすい。

この点、新光寺八幡神社の古式鳥居は、不恰好であるが、昔の人の素朴さがにじみ出ている。

6. 虎御膳（とらごぜん）の五輪塔

片山隧道（片山トンネル）の北側近くの水田の中に、大きな五輪塔が建っている。この小谷山の裏側は、朝宮（朝宮町）から鯖江、府中（武生）へ通ずる昔の街道で、この道路脇に五輪脇が建っていた。

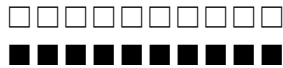
この塔は、蘇我十郎の恋人、虎御前が曾我兄弟の追善供養（ついぜんくよう）のために建てたと伝えられている。

虎御前の生母は、福井市種池（種池町）の者で、種池にも供養の五輪塔があり、この他各地に「虎御前の石」「曾我兄弟の墓」「虎ご石」「虎御前の墓」などが建っている。

片山（片山町）の五輪塔は、鎌倉時代の石造建造物の特色を備えていて、形も美しい。

7. 周辺

- ・ 清水杉谷町、田尻栃谷町、朝宮町、島寺町、清水山町、南居町
- ・ 市指定文化財（史跡） 方山真光寺跡塔址
- ・ 市指定文化財（建造物） 石造八幡神社古式鳥居、石造五輪塔



しみずっペディア 清水山町の伝承
清水南地区 清水山町（しみずやまちょう）

1. 村のおいたち

清水山（清水山町）は、村の後に大きな山を持っていて、この象の形をした山は「水山」といわれ、所々に美しい清水が湧き出るので、大昔から人が住みつくようになった。しかし日野川・天王川の洪水のため、山の中腹の清水の出る場所として、奥の谷のあたり（専伝寺付近）に一番早く住みついたと思われる。

そして、奥の谷や向山の頂上には、立派な古墳が尾根づたいにいくつもつくられてあり、このあたりの豪族の墳墓と思われる。

2. 清水山新保（清水山町の一部）

新保とは出村のことで、枝村とか開発（かいほつ）・出村・新保・出作（しゅっさく）・朶村（えだむら）などの呼び名がある。

清水山（清水山町）には約千九百石の広い田畑があり、北の方の「だんご山」付近の田んぼの稲が盗まれたので、番小屋をつくって見張っていた。しかし清水山の家まで遠いので、作業小屋をつくって百姓をしていて、住みつくようになった。その後、戸数もだんだんふえて、江戸時代のおわり頃には、三十六軒にもなった。この頃は、新保にも庄屋、長百姓を置いて、或る程度の自治が行われていた。

3. 清水山古墳

白山神社の上に簡易水道のタンクを造った時、たくさんの土器が出た。これは古墳の場所であった。

その後、清水町史をつくる時調査したところ、三基の円墳が見つかった。その時清水山下（清水山町）の池鯉鮒神社（ちりふじんじゃ）の尾根にも円墳が四基と、前方後円墳があることがわかった。前方後円墳は、神社の本殿の敷地造成の時こわされて、後円部だけが残っている。

4. 白山神社と境内社

泰澄大師（たいちょうだいし）の信仰なされた、越知三所大権現の神様が祀ってある。境内には明治三十九年の神社廃合令によって、ここに移された神社が建っている。境内の上段には八幡神社、中段には稲荷神社、下段には天満宮と氷川（ひかわ）神社が祀ってある。

このほか清水山城祉には、太田氏の守護神毘沙門（しゅごしんびしゃもん）さまが祀ってある。

5. 新保の八幡神社と、湯立ての火事

通称「だんご山」の頂上に八幡神社が祀られてある。阿弥陀如来（あみだによらい）と聖観音（しようかんのん）が安置されている。

このお宮さんには、湯立ての行事というお祭りが行われていた。これは春祭りに鍋を持ち寄り、境内で湯をわかして、その湯を笹の葉で仏様にかけて「みそぎ」をして豊作を祈るわけである。

ところが、今から二百十年ほど前の、安永三年四月、春祭りの湯立ての行事の折、火が枯草に燃え移って大火事となった。この時十三軒が焼けたので「八幡十三軒の大火事」といっている。

昔から近在の者が、湯に入りたがらない子どもに、「新保の神様んてになるぞ」とか「新保の神様んてな真黒スケじゃ」と言って叱られた。

これは、御神体の阿弥陀如来が黒仏さんであったためか、湯立ての行事があったので、お湯をかけて清めたことから「新保の神様んてな」という喩え話が生れた。

6. 中埜（の）山専伝寺

昔は天台宗で山干飯郷丸岡（やまがれいのごうまるおか）（現越前市）にあったが、その後、親鸞

聖人が越後へ配流（はいる）の折、帰依（きえ）し弟子となり、越中（富山県）までお送りし教えを受けた。その時、良山という法名を賜わり、足羽郡中野村（中野町）へ移り開基（かいき）となった。その頃、中野には専照寺という三門徒派の本山があったので、その末寺となり中埜（の）山専蓮寺という山号であった。

天正十一年には、寺号を専伝寺と改め、元禄三年今から二百九十六年前に、三門徒派から本派本願寺へ転派し、清水山（清水山町）の奥の谷に寺を移し今日に至っている。

7. 百か寺騒動と清水山同行

今から約三百年前の天和三年に、福井の東別院の宗務を預かっていた本瑞寺と、後見役の二寺の独断専横（どくだんせんおう）に対して不満をもつ百か寺との間で、大騒動が起こった。この争いを「百か寺騒動」と呼んでいる。

反対派の百か寺の中、お東からお西へ転派する寺院が次々とでてきた。

清水山（清水山町）には、東派の笹谷乗線寺（じょうせんじ）門徒が百戸近くあった。この頃、専伝寺はまだ中野村（中野町）にあった。ところが、乗泉寺の住職は、強硬派で、お西へ転派することにした。しかし同行の者は、あくまでお東にとどまって東別院の直参（じきさん）になる者が出てきた。

清水山の同行の者も大勢、東御坊へ直参願いのため福井へ出かけた。ちょうどその日は雨風が強かったので、途中の万徳寺で雨やどりしていた。その時、訳を話したところ、それではこの寺の同行になってはどうかと言われ、万徳寺の同行となった。また正蔵寺で雨やどりしていた者は、正蔵寺の同行となったと伝えられている。

8. 三尾野・清水山村境争い

清水山（清水山町）の南「中浜」「辻浜」地籍は、三尾野村（三尾野町）との村境で、日野川増水のたびに川筋が変わるので、争いが絶えなかった。元禄十四年の川欠け事件で、新川の中央を村境にきめられた。その後明和二年今から二百二十年ほど前に大水が出て、清水山の田地一町九反余りが新川になり、反対側の三尾野に砂浜が移ってしまった。

そこで幕府へ訴え出て裁判となった。三尾野では新川の中央が村境であると言い張ったが、幕府評定所では、太閤検地の図面を出して調べたところ、清水山の言い分が通って、三尾野側に移った砂浜は清水山の田地であるとの裁きがあった。

三尾野の村役人は嘘を言ったため、庄屋に過料銭（かりょうせん）三貫目、長百姓（おさひやくしょう）は「急度（きつと）叱り」百姓代は「お叱り」仰せつけられた。

9. 周辺

- ・真栗町、御油町、島寺町、片山町、甕谷町、坪谷町、三尾野町、南居町
- ・市指定文化財（史跡） 清水山城跡
- ・市指定文化財（天然記念物） 石造八幡神社古式鳥居、大杉

□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっぺディア 在田町の伝承
清水南地区 在田町（あいだちょう）

1. 村のおいたち

藩政時代の文書には「有田（ありだ）」と書かれているが、それがいつのまにか「在田（あいだ）」の字を使用するようになったと伝えられている。

また福井藩の主要用水に、「七郷用水有田」とあることから、いかに田地が多く有ったかが想像できる。一方、山が非常に高く、城の台の中腹に土壙墓が発見されていることから、古墳時代以前の弥生時代に、すでに古代人が住んでいたと言われている。

ところが、古墳時代後期になって、人々は山を下り、山の麓に住むようになった。このことは、熊野神社の山裾や明厳寺（みょうごんじ）裏手の山裾に、横穴式古墳が多く発見されていることからわかる。

2. 馬の足跡

在田山（乙坂山）に、大滝・小滝という二つの滝がある。この大滝の岩肌に、馬のひづめの形をしっかりとぼみが残っていて、昔から村人は「馬の足跡」と呼んで来た。

南北朝時代に、畑時能（はたとときよし）という武将が、在田山のとっぺんに城を築き、斯波高経（しばたかつね）軍と戦った。その時、時能は家来に命じて、毎日ふもとの大滝まで水を汲みにやらせたので「馬の足跡」はこの時に出来たひづめの跡であるという。この戦いで城は高経軍の手に渡ったが、その後脇屋（わきや）義助が一時城を取りもどした。しかし高経軍は軍勢を立て直して義助軍を敗走させた。

3. 芝摺山（しばずり）とほんご岩

畑時能がたてこもったと伝えられる芝摺山城は、乙坂山の頂上に東西に土塁が築いてあり、在田（在田町）の者は「城のおろくじ」と呼んでいた。この南の端に前方後円墳が一基あって、江戸時代に盗掘して、錆びた刀が出たとの言い伝えが残っている。

この城あとから甕谷（甕谷町）の方へ下る山道五十メートル位の所に、大きな岩が横たわっている。道をはさんで米俵二俵分ぐらいの大小八個の岩が散在していて、在田の者は「ほんご岩」と呼んでいる。

この岩については、昔神様の宿られた岩座（いわくら）（磐座（いわざ））ではないかと言われている。古代の神様は、山や川、石、木などの自然物に宿られる。この場合、自然石のままでも岩座と呼び、また特定の場所へ岩を列べて、神様をお迎えすることも行われていた。

この岩を、神籠岩（こうごいわ）（神様のお籠りになった岩）とも言い、「ほうご岩」と訛ったのではないかの説がある。

このほうご岩から下った山の中腹に、清水の湧き出る広い台地がある。このあたりに古代の村があったものと考えられ、昔の家の礎石（そせき）や石だたみの道が残っている。

そしてこの付近の急な斜面を段々に開墾して、畠にした所が続いていることから、この三味谷（さんまいだに）から城の台にかけて、古代人が住んでいて、在田の発祥の地ではないかと推測される。

4. 大縄地（おおなわち）

在田（在田町）の南の山の中に、大縄地という地名があり、村絵図にも記されている。丹生郡内には、織田の南に大縄境という地名があり、町内（清水地域内）の平尾清水畑（平尾町、清水畑町）の村絵図にも、大縄と書いた地点が三か所ある。

これは 慶長三年太閤検地の時の、縄入れ起点ではないかと言われている。検地には、現今の三角点のように、村端の突端や、川岸、山の頂上などに幾つかの起点を設け、この起点と起点を見通して角度を計り、面積を出した。今日行われている三角測量の方法によって、長い縄を使って角度を計つ

たり、距離を計って面積を出した。

この検地縄には、大縄（六十間）と小縄（三十間）とがあつて、大縄はゆるみが大きいので、歩畝（ぶせい）があまかつたと言われている。

慶長三年八月に豊臣秀吉が亡くなったので、検地も中止され、大縄地へ縄を埋めたとされている。

5. 落合の渡し（おっちゃんのわたし）

天王川と日野川の合流点に、在田（在田町）の枝村（えだむら）の落合という村があつた。乙坂（越前町乙坂）境の上落合に六戸と、渡し場の下落合に二戸あつて、運送業をしていた。

この落合の渡しには、大舟（長さ七間巾九尺）と小舟の二艘が用意されていて、大勢の時は大舟を、小人数の時は小舟を出していた。

この渡し場は、鯖江・武生方面への極めて重要な交通の要所で、船をつくるのに平尾（平尾町）・清水畑（清水畑町）・白滝（白滝町）の遠方の村や、商人にまで奉加金（ほうがきん）が割り当てられた。

明治時代になって天王川に橋がかけられてから、この渡し場もさびれて、落合村もなくなってしまった。

6. 大岩主一

法満寺住職大岩主一は、僧侶の傍ら医学を修め、越前においてオランダ医学の先覚者（せんかくしゃ）として、種痘（しゅとう）の移入に貢献し、福井藩の名君松平春嶽公に召され、侍医（じい）として江戸の霊岸島（れいがんじま）のお屋敷に住んでいた。

文化二年法満寺住職円証の四男として生れ、子どもの時から向学心に燃え、初め西尾藩天王陣屋の医師松山松庵について漢学を学び、二十歳の時大聖寺の蘭学医生駒玄龍（いこまげんりゅう）に入門し二か年間修業し、その後京都に行って日野鼎哉（ひのていや）に就いて蘭学の奥儀を究めた。

当時越前に於して最初に西洋医学を修めた人である。

二十五歳で帰国し、半井仲庵（なからいちゅうあん）や笠原白翁（かさらはくおう）などと研究会を開いて蘭学が漢法（かんぼう）医学よりすぐれていることを力説した。其後福井で開業したが、西洋医者は始めてで、患者は一人も来なかったと言われている。しかし、だんだん患者も多くなり、財をなしたとのことで、足羽河畔に大きな邸宅を構えるようになった。そして、福井へ種痘を初めて移入する時、笠原白翁に協力し種痘の輸送法を練って、嘉永二年無事福井へ始めて痘苗（とうびょう）を運ぶことができた。しかし大岩主一は気性の強い人で、医師会と意見が合わず不和となった。

その後、法満寺に明巖寺の円（まどか）を養子に迎え住職をゆずり、医業に専念することにした。なお主一の四男大岩貫一郎は、福井藩校教師グリフィスに学び、後福井中学校の二代目校長心得になった。

大岩主一は、文久二年江戸の藩邸でコレラにかかり亡くなった。

7. 周辺

- ・ 甕谷町、鯖江市三尾野出作町、鯖江市西番町、越前町乙坂
 - ・ 乙坂山
 - ・ 市指定文化財（史跡） 在田 1 号墳、在田 2 号墳
-

8. 参考文献など

- ・ 清水町のむかしばなし 昭和 61 年 8 月 旧清水町発行

□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっペディア 甑谷町の伝承
清水南地区 甑谷町（こしきだにちょう）

1. 村のおいたち

「こしき」という穀物を蒸すつぼ型の土器が、生産されていたことから、「甑谷」という地名がついたと伝えられている。

この「こしき」は、弥生式土器の中に多く見られ、つぼの中ほどが細くくびれていて、下に水を入れ、上に木の実や穀物などを入れて蒸した。

また古文書に、「甑谷村に松ヶ鼻という出村がある。」と書いてあることから、甑谷は現地よりもっと上の方の、谷あいにあったと言われている。

2. 糺明神（ただすみょうじん）の由来

甑谷（甑谷町）の奥、坪谷川向う側の近藤隆家後山に、二間三間の御堂があつて、お糺明神（お糺さん）と呼んでいた。

このお宮さんは、もと糺村（現鯖江市）から甑谷へ移されたので、糺明神と呼ぶようになり、次のように言い伝えが残っている。

元弘二年、今から約六五〇年ほど前、護良親王（もりながしんのう）が、北条氏の鎌倉幕府を倒す計画に失敗され、一時難をのがれるため越前国山内村（山内町）に逗留（とうりゅう）された。

山内に二か月をおられたが、四月の終り頃お供の赤松則祐（のりすけ）らを従えられ、坪谷（坪谷町）から甑谷を通過して糺村（ただすみら）へ行かれた。ここにもしばらく居られて、河内の国の天皇方の忠臣、楠木正成（くすのきまさしげ）方といっしょになって、倒幕の軍をおこされた。そして元弘三年六月になって鎌倉幕府を倒され、建武の中興をなしとげられた。

さきに糺村に逗留された時、赤松則祐が糺の南の道場へ、出身地播磨（はりま）（兵庫県）の伊和大明神をお祀りして置いたが、そのまま放置されていた。

ところが、二五〇年後の天正十年に、赤松氏の子孫が播磨から糺村へ移り住み、氏神として稻荷大明神を祀った。

その時、前に祀つてあつた伊和大明神を、北の守り神として甑谷のサガ山の見張所へ安置し、守護神とした。この伊和大明神を甑谷の者は、糺から来られた神様として、お糺明神と呼ぶようになった。

その後、寛文六年に新しく釈迦如来（しゃかにょらい）の坐像（ざぞう）をつくつて、安置したと伝えられている。

明治四十年頃、神社廃合令によつて、馬乗寺（ばじょうじ）観音堂の横に移転し、合併した神明神社の本殿にした。

御神体の裏に、

村中のきしんにしたてまつるものなり

しやかむにぶつ

御志んたい本ん体は、こしき谷村のただすの森

くわんぶん六年丙午（ひのえうま）四月十三日

越前出作（しゅっさく） 大仏師 河瀬上野作

片山 北右エ門志げつく花押（かおう）

3. 神明神社

甑谷（甑谷町）には、氏神様がいくつもあつたが、明治四十年頃に村の入口にあつた「神明宮」に合併された。その当時のお宮さんは、次の通りである。

八幡神社 字新名乙廿四番地 本殿 間口三間

神田 四畝二十歩 奥行三間

白山神社 字新名一番地 本殿 間口一間

	宅地	七畝廿五歩	奥行一間半
観音堂	本殿	三間四方	観音菩薩坐像
神明宮	本殿	三尺に一間 (神鏡)	石造不動明王
糺明神宮	本殿	二間に三間	釈迦如来坐像
こやしの神様	厨子		地藏菩薩立像

4. 摂護山万福寺 (せつごやままんぷくじ)

昔は真言宗で、現在地から一キロメートル程山の中の、墓ヶ谷にお寺があった。ここに坊さん墓(無縫塔(むほうとう))が立っていて、永正十三年二月二十日という年号が彫ってある。永正の年号から推測すると、今から約四百六十年前の室町時代中頃で、当時この墓ヶ谷付近に、寺と民家があったことを物語っている。

その後、寛永年間(三百五十年ほど前)に現在地に移った。その頃、寺の近くの字奥出には、二十戸余りも民家が建っていた。

この時、浄土真宗に改宗し、中本山常楽寺末となった。明治初年には本願寺派となり今日に至っている。

5. 大庄屋河村織右ヱ門

江戸時代享保七年、鯖江藩ができて間もない頃、甑谷(甑谷町)の河村織右ヱ門が十四か村の大庄屋に任命された。

この十四か村を「甑谷組」と呼び、年貢の徴収や検見(けみ)・普請(ふしん)・願書・届書の取りまとめや、通達などの事務を行わせた。

大庄屋には、給米十二俵を渡し苗字帯刀(みょうじたいとう)が許された。寛政二年に一身上の都合で、乙坂村の千秋鶴兵衛が大庄屋となり「乙坂組」と代り、明治の廃藩置県まで勤めた。

織右ヱ門家の屋敷は、万福寺横の広い敷地にあり、村の中心地の辻にあった。この子孫は北海道函館に渡って成功し、衣料品会社を営んでいる。

6. 周辺

- ・真栗町、清水山町、在田町、坪谷町、鯖江市三尾野出作町、越前町栃川
- ・乙坂山
- ・市指定文化財(書跡・書籍・古文書) 甑谷村絵図

□□□□□□□□□□

■■■■■■■■■■■■■■■■

しみずっペディア 坪谷町の伝承
清水南地区 坪谷町（つぼたにちょう）

1. 村のおいたち

「ツボタニ」というのは、つぼまった谷の意味であると言われているが、一方では、壺やカメなどが焼かれていたので、その名前がつけられたとも言われている。

大昔は、甕谷（甕谷町）の西方の乙女谷に村があったが、甕谷の大火の折に延焼して、上の方へ移り住んだため、その場所が、現在の坪谷村（坪谷町）になったと伝えられている。

2. 乙女谷（おとめだん）の由来

平家一族の姫君が、ある日、山の中へ落ちのびて来て住みついた。それで、乙女谷と言うようになったと伝えられている。

またある時、一人の乙女がどこからともなく現われて、ツボやカメなどの陶器を焼く技術を教え、いつのまにか姿を消してしまった。それで、乙女谷と呼ぶようになったとも伝えられている。

3. 白山神社の由来

坪谷（坪谷町）には、上の堂様（どさま）と下の堂様があった。上の堂様には聖観音立像（しょうかんのりつぞう）が祀っており、姉様（あねさま）観音さんと呼んでいた。下の堂様は、南側の谷の山の中段に建っていて、立派な聖観音の立像と四天王が安置されていた。

明治初年に神仏分離令が出されたので、上・下の堂様を合わせて白山神社として、坪谷の氏神様にした。

この時、中出の山の上へ敷地をつくって白山神社の境内をこしらえた。

明治三十九年に、神社廃合令が出され、この時、無格社や雑社は認められなくなり、すべて近くの村社に合併しなければならなくなった。

その村社には条件があり、永続資本五百円以上あって、氏子は百二十戸以上、境内は百八十坪以上なくては村社にならなかった。

しかし、由緒ある神社は存続が認められた。

そこで坪谷では、氏子も少なく永続金や境内の条件がそろわないので、神主と相談したところ、朝日村馬場（あさひちょうばんば）（越前町気比庄付近）には何社も由緒あるお宮さんがあるとのことで、馬場の菅原神社をゆずり受けることにした。

馬場では村も小さくて、お守りできなかつたし、村社に昇格するといふので大変喜んで、境内に灯籠一對を寄進し、毎年祭りには、玉串（たまぐし）料十銭を持ってお参りしていた。終戦後も昔のまま、十銭を持って参ったとのことである。

御神体は、地蔵菩薩立像で、お手が亡失（ぼうしつ）しているが、その容姿が端麗で木目が細かく美しく、町内の仏像中最もすぐれた作である。時代は平安時代頃と推定される。

なお、下の堂様に祀られていた聖観音立像は、室町時代初期の作で、町（福井市）の文化財（市指定文化財）に指定されている。

4. 法栄寺

横越（鯖江市横越町）本山証誠寺（しょうじょうじ）の末寺法栄寺は、もと法円寺といい、天台宗であった。文禄元年、今から四百年ほど前に高田派の真教上人（しょうにん）に帰依（きえ）し、熊坂専修寺の末寺となった。その後、専修寺は畠中（畠中町）へ移ったが、寛文三年に、一身田（いっしんでん）の無量寿寺と畠中専修寺との間に、本山争いがあり畠中専修寺が負けて、破却（はきやく）されてしまった。

その時、法円寺は武周（武周町）の西雲寺に従って、仏光寺派に移り法栄寺と改めた。

その後、文政四年に法栄寺の跡つぎ問題で事件となり、横越の山元派本山の末寺となった。

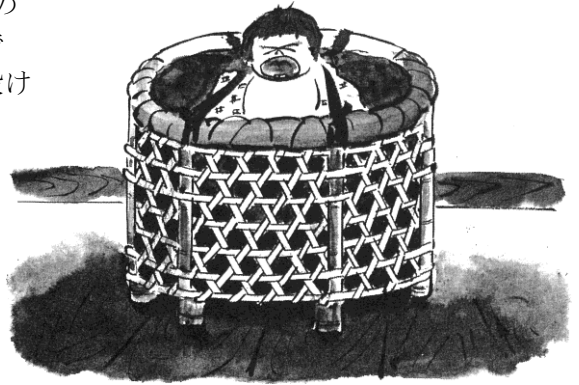
5. 真栗の沖田と松が鼻飛地

甕谷（甕谷町）地籍の北三ヶ山の東に、坪谷（坪谷町）の飛地「松ヶ鼻」があり、また真栗（真栗町）に坪谷の広い水田が、清水山（清水山町）境まで続いていて、ここも飛地となっている。

この飛地は、大昔は御油（ごゆ、御油町）境の真栗地籍にあったが便利が悪く、現在の南小学校（清水南小学校）横の「守坂峠」を越えて、耕作していた。そしてこの峠に子どもを置いて農作業をしていたので、この坂の頂上を「守坂」と呼ぶようになった。

その後、何時の時代かわからないが、現在の甕谷境の田地と交換したと伝えられている。しかしなお坪谷まで遠いので、その中継ぎ場所として、松ヶ鼻に休み場を設け秋の取り入れには稲をここまで運び夜は番人を置いたと言われている。

坪谷は谷あいでは日照時間が短いので、村の入口の高台に「稲干し場」をつくった。ここを「稲場（いなば）」とよんでいる。



6. お神田（おかんだ）と堂の講（どのこう）

向垣内の谷あいに、大神田という「堂付（どうづけ）田」があった。この堂田で穫（と）れた米で堂の講が行われていた。

上の堂の講と、下の堂の講があり、朝から晩まで大飯を食うことになっていて、途中で家へ帰らないよう下駄をかくすことになっていた。

昔は、白い御飯を食べることが楽しみの一つで、堂の講を楽しみにしていたと言われている。

7. 営所（えいしょ）道と灯籠見坂（とうろうみさか）

大森（大森町）から灯籠見坂を越え、坪谷（坪谷町）から落合の渡しを通過して、鯖江歩兵第三十六連隊（営所（えいしょ）といた）へ通じる道は、「営所道」と呼ばれ、重要道路として早くから県道であった。昔は徒歩以外にほとんど交通機関がなかったため、蒲生菜崎（越廼地区）・国見（国見地区）・殿下（殿下地区）・西安居（安居地区）・志津（おおよそ今の清水西地区）方面から、鯖江の連隊へ入営する者は、必ずこの道を通り、面会や出征兵士の見送り、軍旗祭・除隊・戦死者の英霊の出迎えなど、年中人の行き来が絶えなかったため、営所道と呼ぶようになった。

この営所道には、坪谷・山内（山内町）境に急な坂があって、灯籠見坂と呼び、坂の頂上には清水が湧き出ている、見はらしもよくここで休憩した。

昔、この峠から賀茂神社の灯籠の灯が見えたので、灯籠見坂と呼ぶようになったと伝えられている。

8. 周辺

- ・山内町、真栗町、島寺町、清水山町、甕谷町、越前町栃川
- ・市指定文化財（彫刻） 木造聖観世音菩薩立像、木造地藏菩薩立像

□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっペディア 朝宮町の伝承
清水北地区 朝宮町（あさみやちょう）

1. 村のおいたち

朝宮（朝宮町）は日野川べりの山際の小さな谷に人家が密集しているが、昔は山裾の丘陵地に住居があったものと思われる。隣区の片粕（片粕町）には縄文中期の遺跡（グリーンハイツ 4 丁目付近）があり、縄文時代には古代人が住みついていたのではなかろうか。日野川は魚介類が豊富で川べりの丘陵地は洪水にも安全で、近くに清水の湧き出る所があれば、古代人の住居として最も条件のよい所である。

朝宮から南の三・四百メートル川上の片山地籍村境に、大社・上岩淵・蛇淵・清水谷・南大社・堂所という地名がある。近くには長尾谷があり段々畑となっていて、ここから土器片が出土している。恐らく朝宮に初めて人が住みついたのは、この辺一帯の高台や谷の奥に住んでいたものと思われる。堂所は、元神社の建っていた場所で、現在の奥垣内の八幡神社は、堂所にあったと思われる。

中世から江戸時代にかけて、交通の要所として日野川端に舟着場が設けられ、渡垣内（わたりがいち）には運送業をはじめ何軒も商家が立ち並んでいたといわれ、三国湊・福井城下からの物資の積み下しや、里向や山家（やまが）の米をはじめ薪・炭等の産物がここで取り引きされ積み込まれ、賑わいを見せていたと言われている。

2. 船着場

村前（字二号）の竹の内垣内に舟着場があり、商家・問屋・運送屋が密集していた。昔から朝宮（朝宮町）には田地が少なく、商工業者が多かった。明治初年までは、作り酒屋二軒、鍛冶屋、豆腐屋、米屋、油屋、飴屋、桶屋、畳屋、作醤油屋、糸繰屋、塩干魚屋、灰屋、医者等があったといわれている。川船運送業者は十戸余り、諸物資の積み下しで賑わい、秋の末には米穀、新炭、用材、雑穀が積み込まれ、また三国湊から北海道のにしん・鮭・鱒・鱈・こんぶ・肥料など、福井御城下から雑貨類が山のように船から下され、問屋によって売りさばかれた。また笏谷石の積み下ろしもたくさんあったといわれ、現在の朝宮橋から川下岩淵まで大小の船がぎっしりつまっていた。

明治の終り頃でも毎年四月の蓮如忌や、五月の三国祭りにはたくさんの善男善女が日野川を上り下りし、大きな船に帆をあげのんびりと船頭の舟歌が春風に流れる風景が見られたといわれている。

朝宮の村前に藺田（ゆだ）があり、藺草（いぐさ）を栽培していた。古老の言い伝えによれば、島寺（島寺町）（四万寺）の御用畳を朝宮で作っていたと言われている。

製品は、主として雨具用横ゴザ、縦ゴザ、ゴザ帽子の外、飯ゴザ、半畳、イズメのゴザ、寝ゴザ、弁当ゴザ等で、上等の長い畳表はできなかつた。

販売は、小使銭稼ぎのため、冬の農閑期に近在を売り歩いた。また福井東別院の報恩講や法要のお逮夜（たいや）に参る時、背負ってそこで売って帰りおさい銭にしたりしていた。

この朝宮ゴザも、終戦後の物資不足の折、一時需用があったが、その後衰退し昭和三十年頃にはなくなってしまった。

3. 朝宮大根と藍の栽培

日野川べりに湿地が多かったので、藺草（いぐさ）とともに藍の栽培が行われていた。

藍は、昔の衣類の染料として最も多く使われていて、百姓の作業衣はもちろん普段着、ふとんなどの布地は、いわゆる紺色の藍で染められていた。

天然染料の藍は「タデ科」の植物の「アイ」の葉からつくられ、この藍は湿地帯に育ちやすく、日野川べりの清水山（清水山町）、片山（片山町）、朝宮（朝宮町）、片粕（片粕町）などの水浸き畑が適地として栽培されていた。

あい草は、イヌタデやミゾソバ（ギヤル草）によく似た一年生草木で、八・九月頃紅色の小さい花をつける。この藍草を開花期前に刈り取り細かくきぎんで、天日で乾燥させる。

茎と葉が染料となるので、朝宮の日野川河原には、藍干しのむしろが一ばい列べて乾してあった。この藍はふるいにかけて俵にして、藍玉商人に売られ「アイ玉」に仕上げられ、紺屋（こんや）へ卸された。

近くの吉江には藍商人が各地から藍草を買い集め加工して財をなしたと伝えられている。

なお、山裾の畠や河原の砂地では、副業として大根ごぼう、人参などの野菜がつけられ、特に朝宮大根は肌が美しく身がしまっていたので福井の市場で名の通った銘柄となっていた。

ところが明治末期に、日野川の最初の改修が行われ耕地の三分の二余りが河川敷地に接収され、その後昭和三十五年の改修工事により、川べりの畠はほとんど作られなくなった。



4. 朝宮の松

江戸時代の「越前名蹟考」という書物に「朝宮の松」として殊なる風情の松あり。よの人賞翫し侍り（がんしはべり）。と書いてある。現在の八幡神社前の田んぼの中ほどに、大きな松の木が生えていた。相当大きな松の木で、日野川の対岸下江守（下江守町）の村人が、秋の終り頃の、「筵干し（むしろぼし）」に、この松の影が邪魔になったと言われ、枝ぶりのよい一本松で、遠くからも眺められ有名であった。

5. 御本陣・脇本陣

朝宮（朝宮町）は、昔から交通の要所であったので、江戸時代、岩堀門左エ門家を本陣に、児玉孫左エ門家を脇本陣に指定して、江戸幕府役人の地方巡見や出張をはじめとし、福井藩主、名代など高貴な方の休憩所、宿泊所となっていた。

本陣の外に予備の脇本陣を指定し、大名の旅行や社参などには、数百人のお供揃えのため、他の民家も宿舎や休憩所として使われた。

本陣の構造は、門構えと玄関、上段の間をはじめとし、いくつも部屋があり本座敷には露路門（ろじもん）や、庭をはじめとし、奥座敷は八畳間二部屋で、上段の間となっていた。上段の間の前七畳半の横長い部屋が下段の御目見え控え間であった。

このほか、いくつも小部屋があり、供人、警固下役の控室などの外、外には会所場や、下役、お目見え人供人の控所などがあった。

大ききは、間口七間、奥行八間の横入り構造で、このほか、文庫、土蔵など五棟があった。

脇本陣も同様に立派な大きな構えであった。

6. 周辺

- ・ 田尻栃谷町、片粕町、片山町、グリーンハイツ 8～10 丁目、久喜津町、下江守町、南江守町

□□□□□□□□□□

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

しみずっペディア 片粕町・グリーンハイツの伝承

清水北地区 片粕町・グリーンハイツ（かたかすちょう・ぐりーんはいつ）

1. 村のおいたち

昔から片粕（片粕町）はよく働く村であるといわれているが、その割に生活はあまり楽でなかった。それは東に日野川、北に志津川が流れ、その上低地で時どき川水が氾濫し作物がとれなかった。

古書には「難糟」とか「濁末」とか書いて「かたかす」と言った時代があった。しかし広大な田地を持ち、南面には丘陵地帯があつて、水に恵まれ人間が住むのにはとても良い土地であった。

そのため最近この地から出土した縄文土器からも伺われるように、数千年の昔から人間がこの丘陵地帯に住みついていた。しかも数千年後の今日、再び新しく住宅団地（ぐりーんはいつ）が建設されるということは、誠に不思議なめぐり合わせともいえるべきではなからうか。

その後片粕住民は治山治水に努力し、特に日野川、志津川の改修に区民一丸となって努力した。そのため、片粕部落の様相が一変し、今日では清水町内（清水地域内）でも有数の耕地を持ち、然も福井市街に近接していて、めざましい発展をとげてきた。

2. 片粕遺跡

昭和四十七年七月十三日、片粕（片粕町）地籍の住宅団地グリーンハイツ造成工事現場をブルドーザーで掘り起した折、偶然大量の土器が発見された。報告をうけた清水町（旧清水町）教育委員会では、早速県教委文化課と協議して、団地造成を請負う県住宅供給公社に工事の一時中止を求め、七月二十五日から八月十四日までの期間緊急発掘調査が行われた。

発掘作業は県文化課職員の指導のもとで、町教育委員会職員、町文化財保護委員、片粕区長、藤島高校生徒の協力を得て、連日炎天下順調に発掘調査が行われた。

この発掘によって予想外の大量の土器、石器が出土し、また貴重な住居跡なども発見され、県下最大の縄文遺跡と呼ばれ、出土した数千個の土器片は、木箱に百数十ばいにのぼり、一部は破片をつぎたし復元したが、残りの大部分はそのまま保管されている。

近い機会に復元すれば、裏日本最大の最も考古学的に価値の高い「縄文土器群」といえるわけである。

遺跡は現在の清水北小学校校門付近から北側一帯である。この尾根の上、三ヵ所から遺物がまとまって発見されている。

この地で多量の縄文式土器が発掘され、石器では石錐（せきすい）が最も多く、凹石（木の実などをすりつぶすもの）、石鏃（せきぞく 弓矢の先につけた尖った小さい三角形の石）、打製石斧（だせいせきふ）・磨製石斧（ませいいしおの）・石匙（小刀のようなもので動物の皮をはぐために使われたもの）等が出土した。

このほか特に貴重な出土品として、「ヒスイ製の玉」と「丹（に）ぬりの盤」が発見された。

これらの発掘出土した縄文土器の文様から判断して、縄文時代中期以降に製作された土器ではないかと推定され、紀元前二千五百年から三千年頃まででないかと思われる。

3. 八幡神社

御祭神は応神天皇（譽田別尊（ほんだわけのみこと））で、今から約千百二十年前の貞観二年、清和天皇の時代にお祭りした。その後七百五十年後の永正七年に社殿が大風のために倒壊したので、当時朝倉家家臣の清水尻鎚嚙城（やりがみじょう）村野景政が大檀那（おおだんな 再建の頭）となって、造営した。

4. 大山御板神社（おおやまみたのじんじゃ）

「越前国名蹟考」という江戸時代の書物に「延喜式（えんぎしき）大山御板神社片糟（かたかす）に在り白山社と称す。蓋（けだ）し大山縁によりて云うか。素良按（あん）ずるに大山御板神社は、

今立郡舟津神社に座（おわ）す神社考の説誤れり。」と書いてある。

このように大山御板神社の所在地については、片糟村と舟津村と二か所の説があり、名蹟考では丹生郡三富郷の片糟村白山社であると説明している。

片粕（片粕町）は縄文時代から人が住みついて、早くから開けた所で、古代から集落があり神様を祭ったことに異論はないと思われる。

この平安時代延喜式神名（しんみょう）帳は、延喜五年（九〇五）に醍醐天皇（だいごてんのう）の命によって編集された全国の神社名簿で、丹生郡内では雷神社（賀茂神社）・剣神社・大山御板神社（片粕）の外四社が書かれてあり、古い神社であることがわかる。

5. 五社神社

昔の記録には「五社宮」と書かれてあり、この五社の中に「白山神社」が含まれていて、現在の犬鳥居の額には白山神社と書いてある。この白山神社が大山御板神社であり御祭神は伊邪那美尊（いざなみのみこと）・火座霊尊（ほむすびのみこと）・武甕槌命（たけみかずちのみこと）の三柱である。

この三柱の外に八幡神ともう一柱の五柱の御祭神が祭られている。

また、岩淵にあった岩淵神社が、昭和三十四年頃日野川改修の時、片粕（片粕町）八幡神社へ移された。

6. 藤神様（ふじがみさま）

片粕（片粕町）の北の山裾に大きな藤の木があり、その下に石仏が祭ってあり、藤神様と呼んでいた。

天文九年の銘があり、今から約四百五十年前の室町時代の石仏で、町内（清水地域内）で最も古い地藏菩薩である。

現在は、八幡神社入口の十六羅漢堂（らかんどう）に安置されてある。

7. 十六羅漢石仏（じゅうろくらかんせきぶつ）

むかし片粕（片粕町）に栄光寺という禅宗の寺があって、この寺に安置されていた十六羅漢石仏が残っている。

羅漢様という仏様は、釈迦如来の十六人のお弟子で釈迦の説法を聞いて修行をする聖者で、十六人または五百人を一群とし、十六羅漢・五百羅漢という。

その中で第一の賓頭慮尊者（びんずるそんじゃ）は万病をなおす法力をもつとされ、庶民に「なで仏様」として親しまれている。

以前は、八幡神社の後の羅漢堂に祭ってあったと言われているが、何時の時代にどこに禅宗のお寺があったのか、町内（清水地域内）で唯一の貴重な石仏である。

8. 周辺

- ・ 田尻栃谷町、朝宮町、竹生町、清水町、グリーンハイツ 1～4・6・8 丁目、久喜津町
- ・ 市指定文化財（史跡） 結城晴朝館跡